

長野県下高井郡山ノ内町夜間瀬

伊勢宮



1981

山ノ内町教育委員会



△柄鏡形敷石住居跡 第1号



△繩文式土器

▽繩文式土器



△繩文式土器

▽繩文式土器



長野県下高井郡山ノ内町夜間瀬

伊勢宮



1981

山ノ内町教育委員会

序

伊勢宮遺跡は私たち郷土の歴史を解明するという大きな仕事の中で大変重要な役割をはたしており、山ノ内町夜間瀬本郷地区内の土地改良事業を推進するあたり発掘調査を実施した次第です。

調査責任者村上富吉氏、顧問金井喜久一郎氏、金井汲次氏、調査指導長峰光一氏、関孝一氏、団長田川幸生氏をはじめ地元区役員、土地改良事業関係者、考古学研究の方々等多大な御協力を得て、昭和53年秋から昭和54年5月までに、約3,000㎡を発掘し出土品遺物は40,000点をこえました。

今回の発掘のなかで特に注目されたことは、関東・中部地方に特色をもつ柄鏡形敷石住居址を検出したことであり、研磨された敷石部のほかに炉趾、柱穴、縁石、周壁等をそなえており完全な形で出土したものである。これは全国発見例の北限ともいわれております。

佐野遺跡とならびに貴重な資料が出土し古代の未知分野に対する関心も高まったわけであります。

今回の発掘調査に協力をいただきました多くの関係者に心から感謝を申し上げるとともに、田川幸生団長ほかの努力で立派な報告書が刊行されましたことに対して厚く御礼申し上げます。

この報告書がふるさとの歴史を知るうえで活用されることを心から念願いたします。

昭和56年3月10日

山ノ内町教育委員会

教育長 田 中 満

伊勢宮遺跡発掘によせて

昭和53年度より山ノ内町夜間瀬本郷地区が補助事業として計画した夜間瀬南部地区再編農業構造改善事業計画がたてられた。この計画は水田利用再編対策推進のため、未整備水田の区画整理にあわせて一部わい化りんご園に転換造成すると共に集落環境の整備等を総合的に実施し、農業生産性及び集落機能の向上を目的とした事業であった。しかしこの地区内に道路地として伊勢宮遺跡が含まれており、発掘調査について町農政課と町教育委員会が現地調査を行い、地主の承了を得て試掘調査をした。この結果一部より縄文時代の土器が発掘されたため文化庁の許可を得て緊急発掘を実施することになり、役員会を何度も開催し組合員の協力を得て発掘調査をした。この結果が報告書の中で詳細に報告されているが現在は埋めもどされ立派なりんごわい化団地になっている。発掘調査にあたられた田川団長をはじめ、発掘調査団の各位、直接発掘にあられた組合員の協力に感謝します。

昭和56年3月10日

新農構集団農区本郷地区総合整備組合

組合長 畑 上 儀

例　　言

- 1 本書は、本郷区団場整備事業に伴う、山ノ内町夜間瀬伊勢宮遺跡の緊急発掘調査報告書である。
 - 2 発掘調査は、山ノ内町教育委員会が調査主体者となり、昭和53年11月・12月の第1次と、昭和54年の3月・4月・5月の第2次の調査をした。
 - 3 発掘調査の遺物の整理は池田実男が、図版の整理は荒井宏が中心になっておこなった。
 - 4 本書の執筆は、田川幸生以下、畔上秀雄・檀原長則・池田実男・山上右八坂口孝雄が分担した。
 - 5 本書の編集は、調査団の田川幸生と、畔上秀雄・檀原長則がその任にあつた。
-

目　　次

序　文

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
III A地区	6
IV 出土遺物	32
V B地区	60
VI C地区	64
VII まとめ	71

題字「伊勢宮」は山本金太山／内町教育委員長
表紙カット　敷石1号住居炉跡出土の縄文式土器
扉　A地区発掘全景

I 調査に至る経緯

第1次発掘調査

伊勢宮遺跡緊急発掘調査は、本郷地区圃場整備事業にともなうものである。53年10月16日範囲確認調査を日本考古学会員金井次先生により行い44ヶ所の試掘穴（1m×1m）を設置し試掘した。この結果伊勢宮2945番地-1（約5a）が遺物の濃密な埋蔵地として確認され工事前に発掘調査を行うことにした。地主である畔上正氏の承諾を得て、53年11月11日より12月にかけて日本考古学会員田川幸生先生を発掘調査担当責任者として発掘調査を行った。敷石住居跡1ヶ所を含む多数の土器片、列石造構等が出土した。気象条件等の関係でいったん打らざるを得なかった。

第2次発掘調査

54年3月21日より調査を始める。前年度発掘した敷石住居跡及び列石造構の周辺を中心ぐリット（2m×2m）を設置する。作業能率をあげるために、バックホーによる表土はぎを行い、水田、リンゴ園より新しい造構がでた。次に各発掘現場の経過を明確にするため下記のように名称をつける。

第1現場 もも畑 地主 畠上 正
第2現場 水田 地主 中島友三郎
第3現場 リンゴ畑 地主 畠上 和義

第1現場（A地区）

前年度発掘した場所にグリット（2m×2m）を75ヶ所設け、各グリットを発掘調査する。前年度発掘した列石造構を掘り広げていくうちに、新しい敷石住居柄鏡形敷石造構が発掘された。前年度発掘した住居跡より規模も大きくすばらしい造構が発掘された。（敷石周囲が鉄平石で囲まれている。中央に「いろり」があり完成品に近いカメが発掘された）柄鏡形敷石造構付近より骨片も多数発見され、石斧、石鎌、土器片（ダンボール箱約50個）を発掘する。

第2現場（B地区）

バックホーにより表土（作工）をはぎ、移植ゴテ、竹ベラで掘り広げていくうちに発掘現場北側より「いろり」跡が発掘された。周囲は8個の石で囲まれ中は2段に落ちこんでいる。周囲の石は赤く焼けており日数がたつうちに風化したり、き裂が入ったり傷みがでてきた。また周囲より柱穴も発掘され人間が住んでいた場所として証拠づけられた。この付近は土器片より判断すると、绳文後期と土師時代の住居跡とみられ周辺より柱穴が多数発掘された。また当時使用したと思われる土器片、石斧、石皿、骨片等日常必要品も多く発掘された。また土偶も発掘され當時の生活がうかがわれる。

第3現場（C地区）

前年度表土（作工）をはぎ石組造構が発掘されたが降雪等により54年度発掘する。この付近は、大小さまざまな石により造構ができる中より「いろり」跡とみられるもの1ヶ所発掘される。また直径約1mの円形の集石造構が発掘された。

なむこの発掘調査にあたり、各方面からのご協力に対して厚く御礼申し上げます。

（坂口孝雄）



II 遺跡の位置と環境

1、遺跡の位置

伊勢宮遺跡は、山ノ内町西部地区の夜間瀬本郷にあり、本郷区にて祭祀する伊勢大神宮の社叢東側に極めて接近した、標高約490mの位置にある。

北に高社山(1350m)の秀峰を望み、東に城山(850m)に続く連山を見る、また西に夜間瀬川を隔て箱山(647m)あり、南は夜間瀬川の氾濫によって生じた扇状地の奥、湯田中温泉郷へ続いている。

遺跡の西南を流れる夜間瀬川は、その源を大沼池に発した横湯川と、横手山に水源をもつ角間川の急流が、島崎地籍で合流、北へ流下して千曲川へ合流している。この川は、中世、近世を通じ重要な水資源のため、周辺農民の間に多くの問題が生じた記録もある。現在も多目的に利用されていることは勿論、繩文時代にも、関係深かったことが、出土する遺物にも知ることができる。

またこの遺跡は、上条扇状地の末端と、高社山のゆるく傾斜した長い裾の末端が、遺跡北を流れる泡貝川を中心に接点になっている。泡貝川は古くから開発された水田の灌漑用水で、流下して夜間瀬川に入る。地形から見てきわめて自然の川であるが、特異の点はこの川を境に、北側には遺跡らしいものが、一つもないである。

夜間瀬川の氾濫した扇状地には、处处に残った大小の土壠がある。それらの場所には遺跡も遺物もなく、広い範囲の伊勢宮遺跡は、氾濫の後の河原石の上に、約30cm程堆積した黒土の底にある。

また、前記遺跡の北にそびゆる高社山の東に、飯盛山(1064m)が並んでおり、その間を昔から「唐箕通」と呼んでいる。その山間から吹き下ろす北風は「山背風」で、遺跡はまさにその通り道である。夜間瀬の住民は晩秋から冬を通して現在までも悩まされているのである。したがって遺跡はその風道の下に造成されているので、繩文には厳しい生活条件であったことと思うのである。

2、周辺遺跡

伊勢宮遺跡とは、本郷地区にある遺跡の代表的名称で、西南地続きに、町裏、町、東町等の遺跡がある。これらの遺跡はいずれも同時代のもので、繩文時代早期のものから、弥生時代に至るまで種類において、出土せざるものなき一大遺跡である。

四ツ屋遺跡 四ツ屋地籍をかつては百塚と呼んだ由、明治初期まで二基の古墳があったという。耕作の折りに出土した遺物は、加曾利E式の土器、打石斧、砾石、凹石、石鎌等。

上条遺跡 昭和42・43年と山ノ内教育委員会で発掘した、加曾利E式の完形土器及破片に、47点の打石斧、石鎌が出土した。

上条的場遺跡 県道中野長野原線の西側にある。畠地から繩文前期の土器に、有柄鎌出土。

吉沢遺跡 この遺跡は吉沢部落の東側にある。遺物は加曾利E式土器及打石斧、石鎌等。

上条境遺跡 本郷部落の東南にあり、現在リンゴ畠、農耕の折疊石斧2点の外土器片出土。

和田遺跡 和田とは古語で水たまりの意、和田部落はかつてそのような、地形であったか。遺物は勝坂、加曾利E式の繩文式中期。

城ノ腰遺跡 横倉部落の東、小字城ノ腰にあり。地主の塙田金治郎氏が水田を畑に転換目的で工事中出土。土器は繩文前期の南大原、上原、下島式等で、石器では打石斧、磨石斧、石匙、石鎌等であるが中に珍らしいものとして、黒堀石製の釣針状石器があった。

天神森遺跡 横倉区小字天神森にある。遺物は繩文時代の石棒、磨石斧、石鎌等である。

下前坂遺跡 前坂部落は西へ急傾斜した所へ、段状に集落がいとなまれている。部落の下方にあって平坦地に移る所に立地している。遺物は縄文早期末の土器片と、打石斧、石鎌等。

宇木遺跡 小字免山にて宇木部落西方斜面である。縄文前期の有尾式土器片、打石斧、石鎌、石鏃等出土している。
横前遺跡 八柱神社の西下、石槍、石鎌、礎石斧、石皿等出土している。

平安時代遺跡 昭和51年5月伊勢宮遺跡の一部を緊急発掘した。その結果縄文中期後半の祭祀遺跡1基が発掘され、それより北20mの場所から初めて、平安時代の竪穴住居跡1基が発掘された。中央に柱穴、南側にカマドの跡があった。(山上右八)



柄鏡形敷石住居跡 第1号 (カラー)

住居跡の円形部は径3.8m、円形部から張出部までの長さは6.5mである。円形部は竪穴状をなし、深さは東壁付近で15cm内外である。張出部は壁がなく、全体として周辺より10cmから20cmぐらいい低い。

柱穴は敷石部の外周に15個、内部に15個が完全に確認される直前である。そのため、全部は写っていない。柱穴の確認は、黒色の堆積土のため困難をきわめ、雨あがり後の、土壤の水分・土質や土色・土の硬軟等から、総合して検出した。また土壇(1)にはS1を、土壇(2)にはS2の蓋石とみられるものを、移動した状態で撮影したものである。以上のことより9頁写真下と、第4図を比較参照されたい。

縄文式土器 4点 (カラー)

左上 高さ20cm・口径14cm・低径6.5cmの深鉢形の小形品。口唇に三ヵ所の隆起があり、その外縁に沈線を配す。底部近くを除き、全面に縄文を施す。その中にうず状円形の窪がき沈線2こを、上下に並列したのが7組ある。またうず状円形部の縄文の一部を消し美しさを加えている。薄手の精巧品である。

右上 口径23cmで胸部以下を欠く大形の甕か。口唇に5ヵ所の隆起をもち、くの字に外出した口縁を作っている。窪がき沈線内に縄文が施してある。

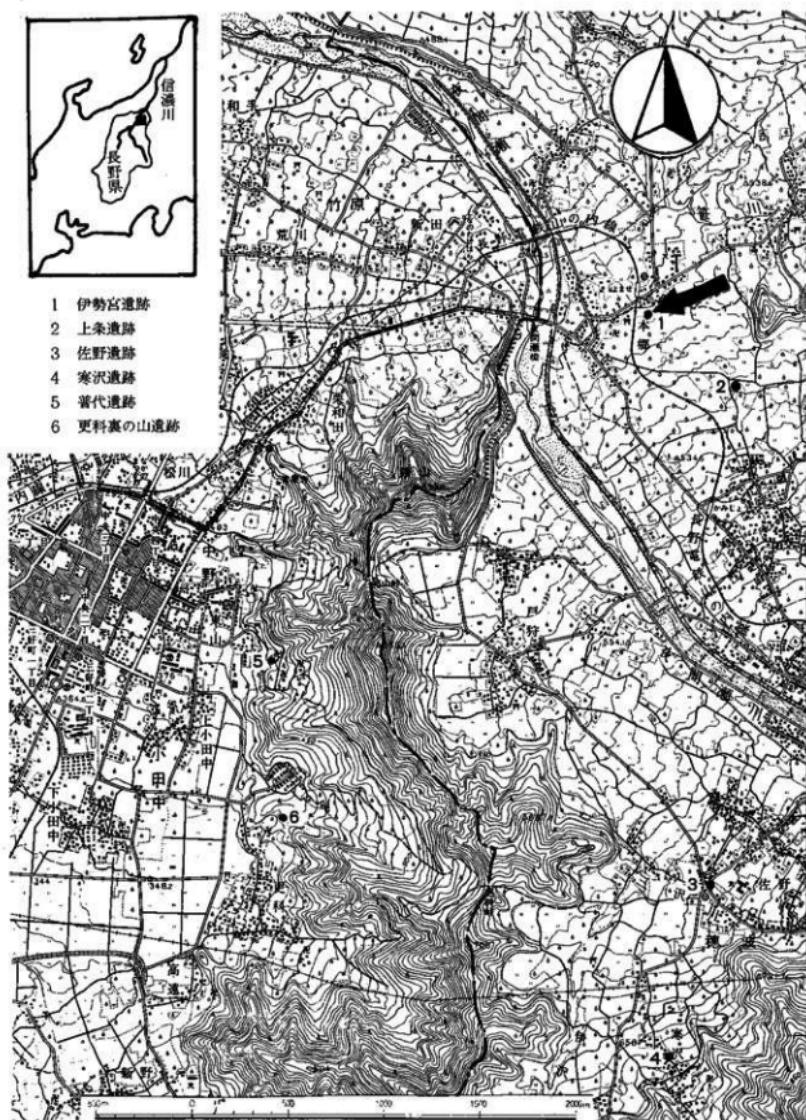
左下 高さ15cm・口径11.5cm・低径6cmの深鉢形の小形品。口唇に1対の隆起があり、そこに1穴ある。底部と口縁部の一部を除き、全面に縄文を施す。窪がき沈線は肩部に横に一条配し、たてにはU状の変形を数本施す。薄手の精巧品である。

右下 高さ17cm・口径19.5cm・5.7cmの慶形土器で、1号敷石住居跡より出土の完形品である。底部の一部を除き、全面に縄文を施し、上半部に窪がき沈線をU字形に施し、その中に数個の列点文を配するもの4個所。下半部にさかさU状の窪がき沈線文を4個所に施す。

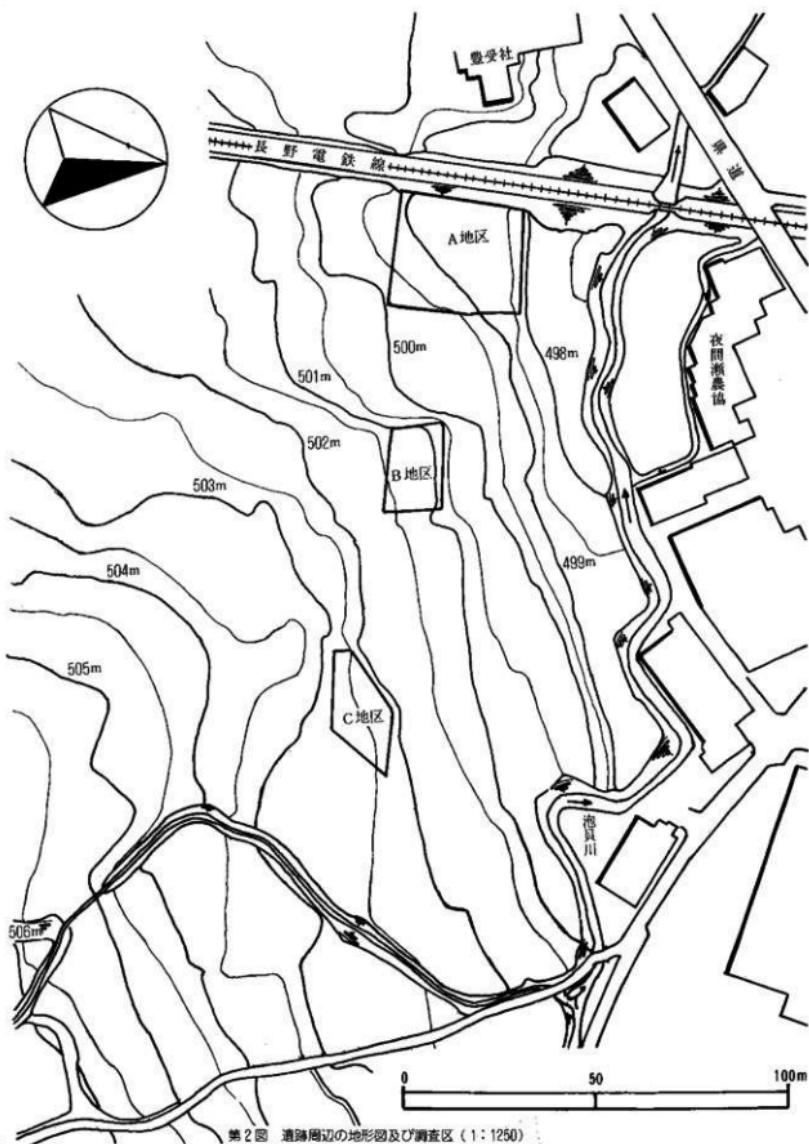
(畔上秀雄)



- 1 伊勢宮遺跡
- 2 上条遺跡
- 3 佐野遺跡
- 4 寒沢遺跡
- 5 著代遺跡
- 6 更科裏の山遺跡



第1図 伊勢宮遺跡の位置と周辺縄文遺跡分布図（1:25000）



第2図 遺跡周辺の地形図及び調査区 (1:1250)

III A 地区

ここは、今回調査の地区の中で、出土遺物が最も多く出土したところである。

地形は現在、西側に長野電鉄線が設置されていて、その路面が高くなっている。また東側は開田工事のため、石垣による高い土手となっていた。発掘前においては、かなり低い凹地にみえたが、原始時代に於ても若干の凹地であったことが、調査段階でも明らかになった。

発掘前のこの地目は、畑地であったが、数年前までは水田であった。そのため表土の第1層は、耕作土で、黒褐色土層であった。第2層は床土で、灰褐色を呈していた。第3層以下は場所によって若干異なり、下方の北側ほど黒褐色を呈し、南側ほど褐色土で砂礫を含んでいて、遺物の包含層である。第4層は主として遺跡面で、黒褐色土層で遺構が切り込まれている。第5層はいわゆる地山である。南側ほど黄褐色が強い岩礫層で、北にさがるにしたがい黒褐色となる。ピットや土塙等が切り込まれていた。

調査は、43年11月・12月に発見された、敷石住居跡や列状の配石遺構はそのまま保護しながら調査にはいった。44年3月A地区にグリットを設定した。設定は西側から東に向かってAからMとし、南から北に向けて1から19とした。ここからは多くの遺構や遺物の発見をすることができた。トレンチは南北に中央に大きく1個所、西南と北東に短く各1個所入れて遺構と土層を確認した。

発見された遺構は配石を主としたものであった。その遺構は、柄鏡形敷石住居跡(2)、列石状遺構(2)、小集石状遺構(3)、広い集石状遺構(1)、配石土塙状遺構(2)、その他ピット多数にのぼる。

遺物もまた多数に及び、今回発見遺物の8割強は、このA地区からである。出土遺物は、次の通りである。

土 製 品 (縄文時代)

斐形完形土器	1	肩 部	32,834	深鉢片	1	円板状土器片	6
ミニ完形土器	3	底 部	966	土器蓋	1	土 偶	1
口縁部把手	240	口縁部	2,849	注口部	3	耳飾?	1

石 製 品 (縄文時代)

磨製石斧	20	凹 石	98	石棒片	35	磨製石片	35
磨製石斧片	4	凹 石 片	20	蜂の巣石	4	磨製平石片	100
打製石斧	64	石 盤	14	敲 石	13	石柱状石片	1
打製石斧片	85	石 盤 片	4	すり石	23	焼 石	14
石 錐	31	石 銚	2	すり石片	3		
石 是	2	石 棒	11	磨製丸石	51		

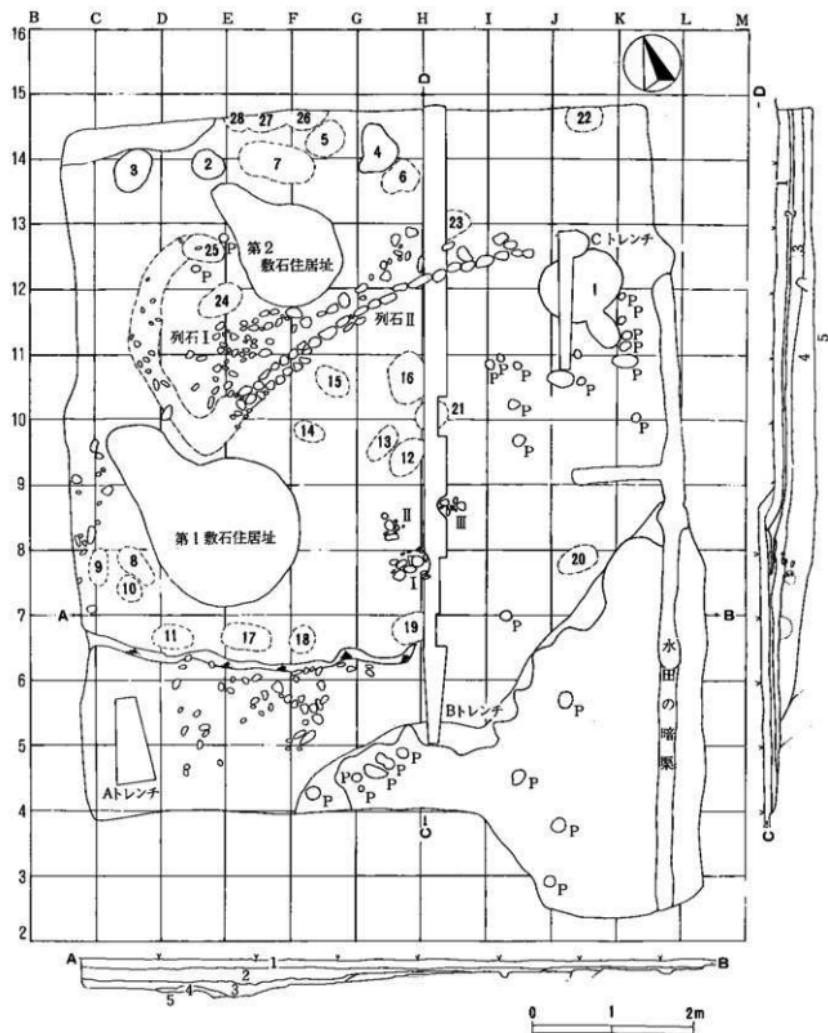
そ の 他 (縄文時代)

骨 片	467	木炭片	40
-----	-----	-----	----

土 製 品 (土師以後)

須恵器片	3	土師器片	1
------	---	------	---

(畔上秀雄)



第3図 A地区全体図 (1:450)

柄鏡形敷石住居跡

今回の発掘では、A 地区からは 2 例、C 地区から 1 例の発見をみたが、ここでは A 地区の 2 例をとりあげる。

1号住居跡（第4図・9頁下の写真ほか）

A 地区の中央よりやや西寄りより発見された。西北さがりの自然の地形の中に作られた感じである。東南に円形部を置き、北西に張出部が配置されている。円形部から張出部に向かって、わずかながらの傾斜をみせている。周囲からみると、全体が一段と低く、特に円形部は豊穴状となっている。

円形部の周りは、扁平な安山岩平石や河原石によって、柱状あるいは壁状に地中に刺し込み周壁を支えているところが大部分である。東側のごく一部は、粘土によって固められている。周壁は、東南の奥壁付近で 0.25m、張出部の近くでも 0.2m 前後となっている。

張出部の周囲は、円形部のような壁は検出されなかったが、内部の敷石は 0.1m ~ 0.2m 前後低くなっている。円形部の壁にそって、発掘途上認められたことは、住居跡の屋根の裾を支えたとみられる岩礫の存在である。人頭大から拳大の河原石が、壁際にそって両側に落ち込んでいた。（写真10頁上参照）

柱穴は円形部の外周にそって 7 個、張出部の外側に 8 個存在した。内部は、敷石の隙をぬって円形部に 7 個、張出部に 8 個存在した。柱穴は外周部の方が大きく約 0.25m 前後、敷石内は約 0.18m とやや小さいのが多い。

住居跡内の敷石は、安山岩平石を主として使用し、全面磨かれた石を敷きつめている。その間隙を河原の小石の平面を出し埋めている。この安山岩平石は、遺跡の東西共に約 0.5km の雀山や紫岩から求めることができる。

円形部の中央には、略五角形の石壇の炉があり、この中から縄文式土器が、上向の正位に置かれていた。

また円形部の出入口部に土塙が検出され、ここからは若干の土器片と、細長い棒状の河原石の凹石が置かれていた（写真12頁下参照）。張出部中央にも、土塙が存在した。ここからも若干の土器片の外に、石棒状石が検出された。

円形部中央の炉跡と、この二つの土塙は、ほぼ一直線

上にほぼ等間隔に配置されている。S₁と S₂の平石は、土塙の蓋石とみられ、土塙に合わせるとピッタリであることが確認された（口絵のカラー写真参照）。

住居跡内出土遺物の特色は、円形部の壁にそって、右図のような状態に置かれていたことである。

2号住居跡（第5図・20頁写真ほか参照）

この住居跡は、全体の半ほどしか敷石部が存在しなかった。ここは始め、多角形（6~8 角）の敷石住居跡とみなしていたが、周囲の土質の差異から、多角形の柄鏡形住居跡と断定できた。即ちこの住居跡の周辺部が弱い黒褐色土に対し、多角形部、無敷石部は堅く固められており、細かい砂利が混入していた。また多角形に接する張出部は、自然土に砂利が混入していた。先端の張出部は、黒褐色の色が強く感じられた。明らかに張出部の存在が認められた。そしてまたこの住居跡は、自然の地形に合わせて作られており、張出部の方が若干傾斜しておらず低い。住居跡は多角形部の幅 3.6m、多角形部から張出部までの長さは 5 m である。

この住居跡の敷石は、1 号と全く類似している。安山岩平石を磨き、間隔を河原石で埋めている。ただ敷石が円形部を中心に企状に存在するだけである。その敷石の張出部に近い先端に石皿を配している。

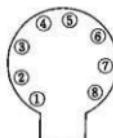
また中央は石門はないものの、略円形の炉状をなし、口縁部と胴部を欠いた、縄文式土器 2 個が重ねて正位に置かれていた。2 個の土器の出土した炉跡と石皿は、張出部と多角形部のほぼ中心部を走っている。

遺物の出土状態の特色として、1 号と類似した東北角から同種の石棒が出土した。

この住居跡は 1 号のように周囲の壁部が検出されなかった。しかし柱穴は、住居跡内から 6 個、外周から 15 個、検出されたが、大きさは、同程度の 0.3 m 前後が主である。

後述するがこの住居跡の敷石部に接する配石の列状配石と、張出部先端に存在する配石土塙は、均正のとれた位置にあり、関係深いとみられる。

（畔上秀雄）





△炳鏡形敷石住居跡 1号(左)・2号(右)・(中央は列石)



△第1号炳鏡形敷石住居跡(発掘最後に写す)



△羽鏡形敷石住居跡（周壁部に自然石が集石されている）



△羽鏡形敷石住居跡左空間部（周壁の集石を取り除いた壁部の状態）



△柄錐形窓口付住居跡 右空腹壁

・窓穴中央より少しあじて右が第一回柱穴
・中央地に「瓦をえぐる窓壁」



△柄錐形窓口付住居跡 右空腹壁

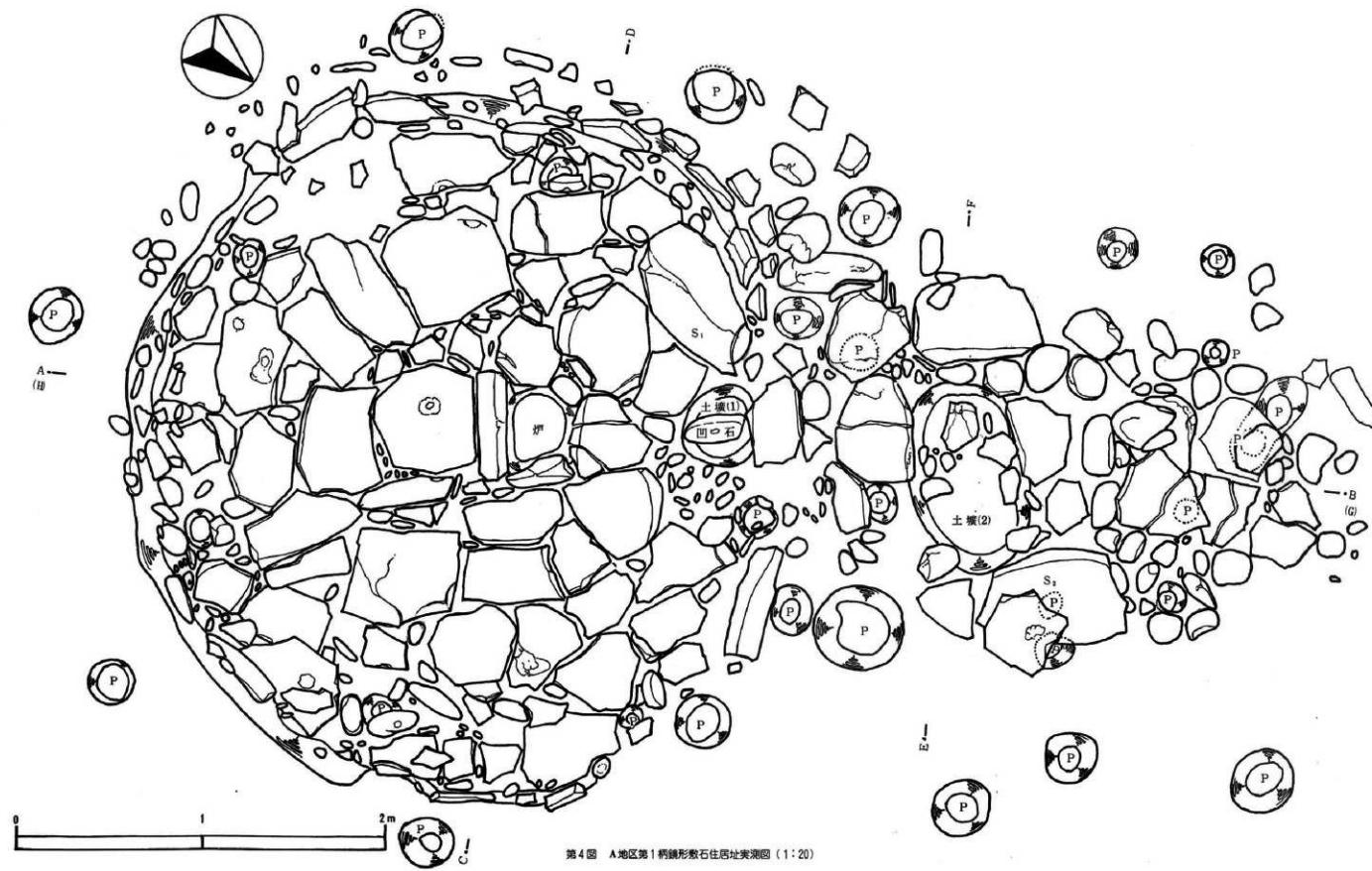
△炉跡内の縄文土器の状況



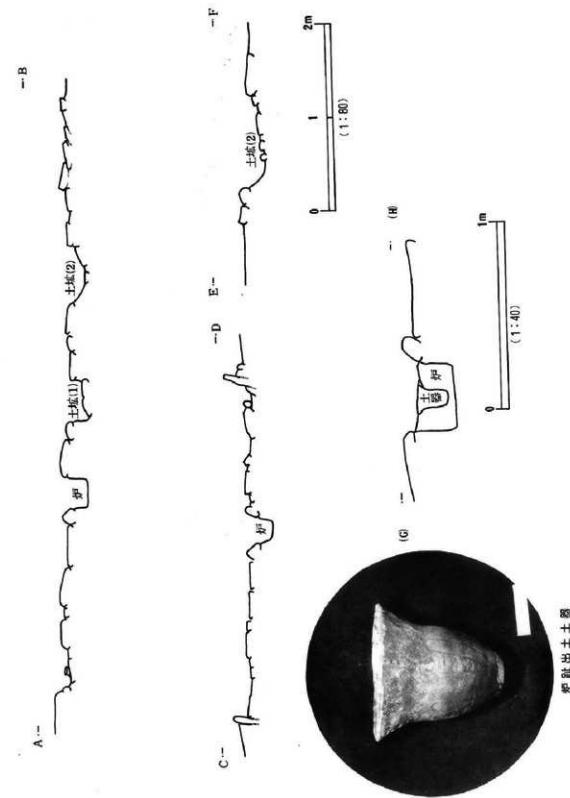
△炉跡内の縄文土器の状況

△主入口附近の土はね(中央部)(右)

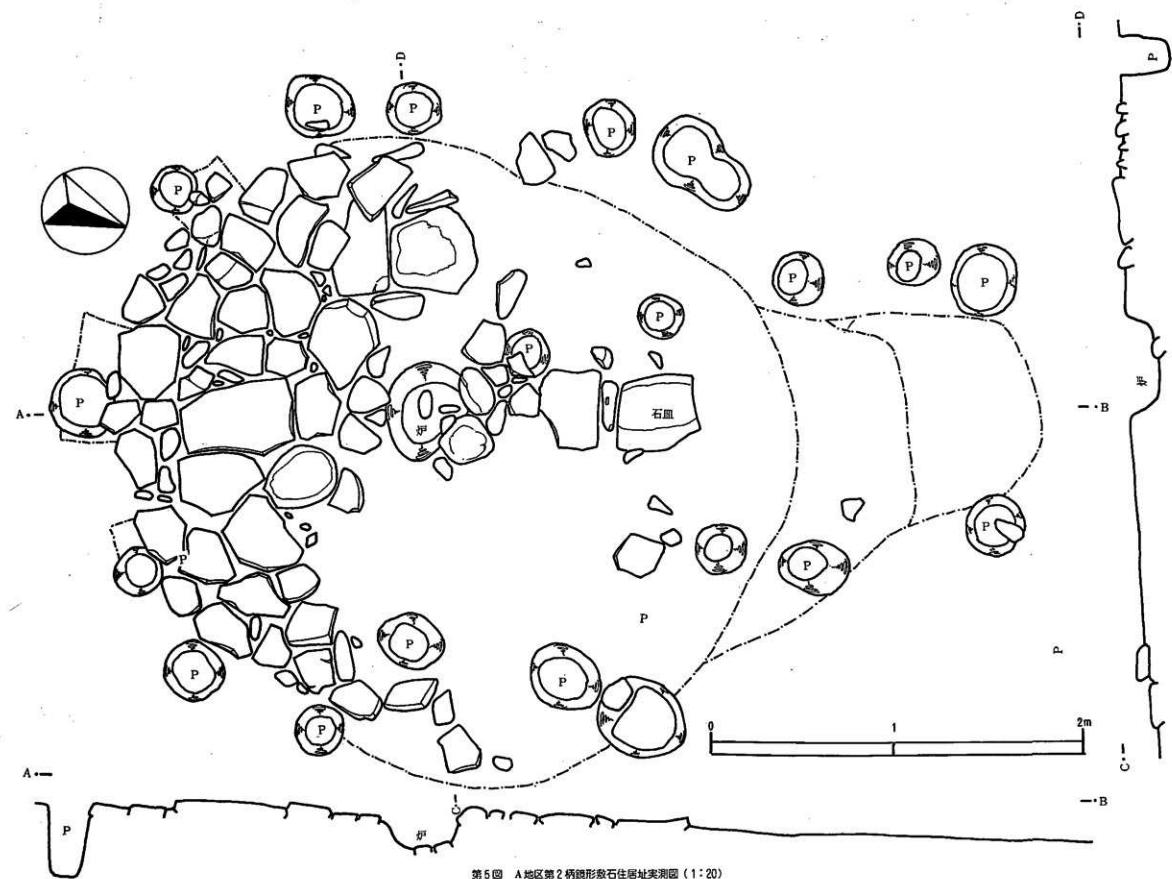




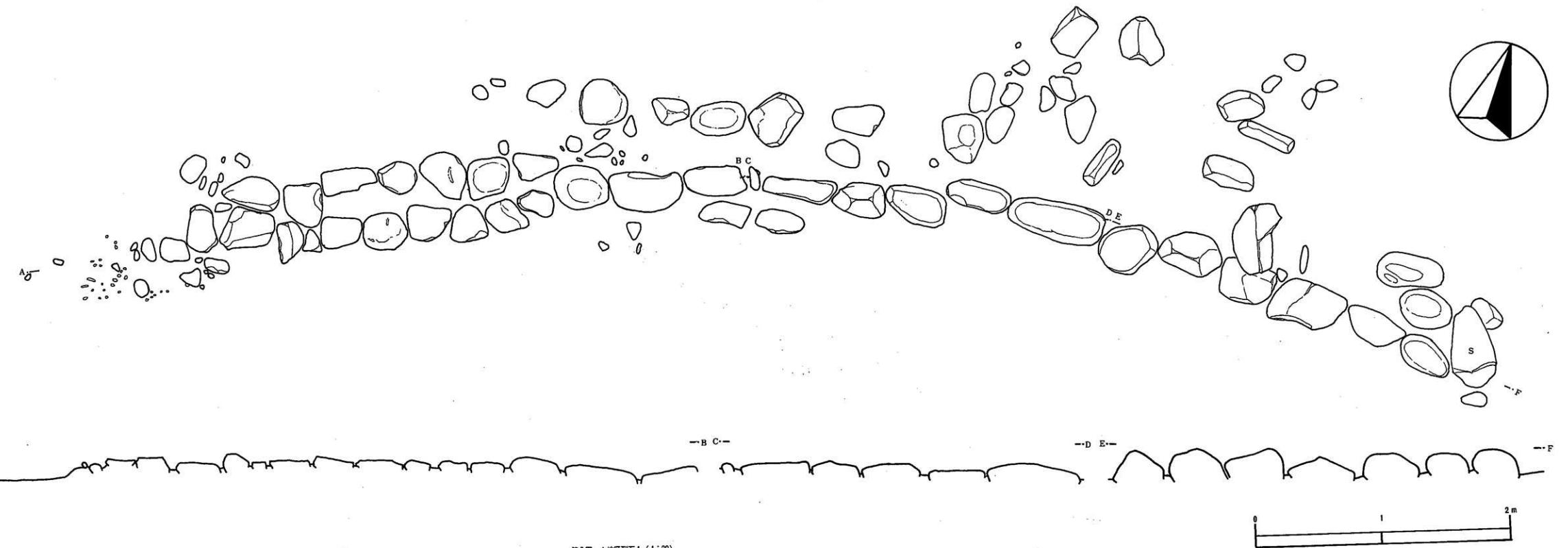
第4図 A地区第1柄鏡形敷石住居跡実測図 (1:20)



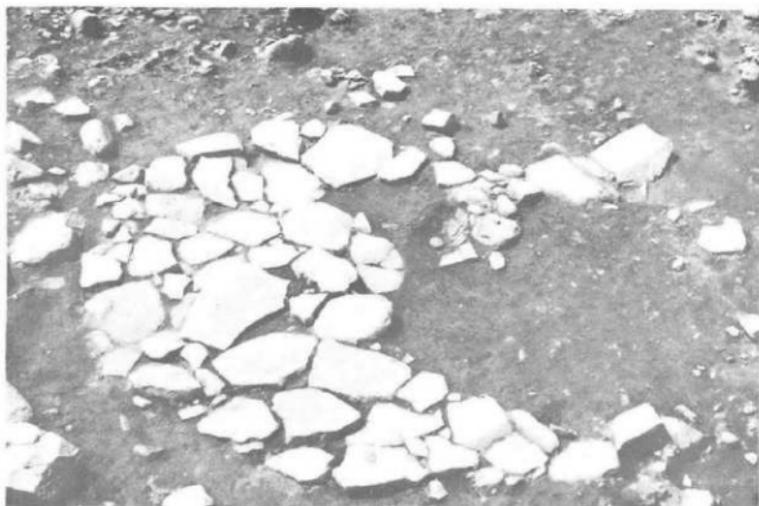
炉盤出土土器



第5回 A地区第2号居住址実測図 (1:20)



第6図 A地区列石1 (1:20)



△2号敷石住居跡（東側より）中央は炉趾内の土器 右のはしにみえるのは石皿



△中央部炉趾内の土器

配石遺構

A地区の調査の遺構を一口に言うならば、配石を主にした遺構であると言える。敷石住居跡についてはすでに述べたので、ここでは次の配石遺構の内容をとりあげる。

○孤状列石グループの2例

○広い集石グループの1例

○土壙のない小集石グループの3例

○配石土壙グループ28のうちの1例

1、孤状列石

孤状列石1号（第6図・写真22頁ほか）

柄鏡形敷石住居2号趾の南側に接して発見された。この列石が最初に検出された時は、無雑作に列石の周辺に岩礫、土器片、骨片、等が乗っていた。それを取り除いたところ、写真や図面に示す状態となった。

列石は人頭大以上のものが主である。東端のS河原石は細長く横たわる浮石である。以下西方に向かってゆるい孤状をえがき配石が地中に埋まっている。これは途中敷石住居に接近したところを過ぎてより2列になり、やがて列石が切れる。全長11mである。列石が切れたところから、大豆大以下の小礫が約0.8m続き、自然に消える砂利質土となる。そして柄鏡形敷石住居趾に接する。この砂利質土は、列石を取り除いた時の埋立土とみられる。

このように西端はうやむやに終るが、東端の区切れは明確で、先のSの細長い岩石は立石状石で、その岩石の根元は土質がやわらかく、立石であったとみなされ、後に何等かの影響で倒れたとみられる。

全体的な配置と列石西端の状態からみて、2号住居趾とかなり関係深いとみみたい。

孤状列石2号（第7図）

2号住居趾より約1m離れた位置より発見された。1号列石のような大きな岩石を利用せず、拳大を中心とした河原石である。列石というよりは、集石した感じで、ところによって異なるが幅0.8m、長さ5.5mで、1号と同様に孤状をえがいている。1号とは同一形態ではない。



△2号敷石住居跡と1号列石と2号土壙

2、広い集石遺構（第11図）

A地区の南側で、先の2つの敷石住居跡より0.4mから0.8m前後の高い位置になる。西側が長野電鉄線路にさえ切られ、南側が圃場整備地区外であるため、その全容はつかみにくい。

しかし全くつかめないわけではない。この遺構の東南は住居跡の柱穴とみられる遺構が、半円状に2ヶ所以上にわたって顔を出している。この住居跡とみられるものは、開田工事の際に削りとられ、そのまとまりを欠く。一応住居跡の外縁部の配石遺構とみる。

発見された集石地帯は略東西8m・南北4mである。無雜作の集石は河原石を中心とするが、注意を引くところを2・3取り上げてみると、安山岩平石が数枚平らに置かれているところ。ぼろぼろな石棒が横たえられている場面。峰の巣石が2個置かれていたところ等である。この岩疊の中に土器片・石器片も散存していた。

これらのうち特に気付く点は、峰の巣状石が検出された、ほぼ中央部付近からは、黒曜石や粘板質の石屑145点以上がみられた。また、砂岩質の石皿状の砥石の発見もある。石器製造場所か、石器の捨て場か。それとも特殊な遺構か。

3、土塙のない小集石遺構（第8図・写真26頁）

柄鏡形敷石住居跡1号の東約4m付近から、3号の土塙のない集石跡が検出された。たまたま、B号トレンチがこのうちの2ヶ所の遺構にかかり、土塙のないことが確認された。他の1ヶ所の遺構も、その形態が類似しているので土塙がないとみたい。

I号集石 人頭大の河原石3個（S₁・S₂・S₃）を並べ、その前面に平らな石（S₄）を置く。その周りを拳大の河原石をめぐらしている。これらの集石は焼かれており、特にS₄にはひび割がみられる。

II号集石 左右に入頭大の河原石（S₁・S₂）を置き、その中间に拳大の小石5個を配置し、さらにそれをS₃・S₄のやや大きい礫石で囲っている。

III号集石 S₁・S₂・S₃・S₄と次第に大きな礫石を並べ、その間を小礫によって埋めている。

以上3号の共通点は、先にも述べたことを含めると、土塙を持たない。小さいまとまりながら、一定のリズムがある。1号のS₄にみられる、焼かれたりした火のあとが確認されるなどである。

4、配石土塙（第9・10図・写真29・30頁）

配石のある土塙が28号検出された。2つの敷石住居跡の周辺で三群となる。住居跡の南・東・北である。西側は電鉄線のため未発掘のため不明である。

これらのうち8号を発掘した。その特色の概要を示すと、ほとんどがだ円形に近い。幅0.5m・長さ1m前後・深さ0.4m前後である。土塙内は小礫を含む土器が散在している。その内容は取りたてるほどのものでない。しかしこれらのうち特色あるのが柄鏡形敷石住居跡2号の張出部先端の2号土塙である。

2号土塙 幅0.5m・長径0.8m・深さ0.4mのほぼだ円形の土塙である。土器片と共に河原石・安山岩平石のある点は、他の土塙と変わらない。その特色は、人頭形岩石の首元に、菱形の尖石部を差し込まれていたことがある。人頭形の岩石は、長さ0.3m・幅0.2m・厚さ0.1mで、ちょうど大人の人頭大を平たくしたものである。額と頭髪部がやや盛り上っている。河原石であるが、ふき出物状の小穴が全面にあるが、ここに眼・鼻・口や耳を切り込むと人面石を思わせる。

この岩石は、土塙のほぼ中央から検出され、首部に近い位置を斜め下向にし、顔面を上向きにして置かれていた。そして菱形石の平石の尖部を、顔面石の首部に突き差し置かれていた。ちょっと無氣味である。

この土塙は、柄鏡形敷石住居跡の張出部先端部に位置しており、何等かの関係があるとみられる。

（畔上秀雄）



△列石 1号（西側より）



△列石 1号（西側より）
（くわんじやうひがしより）



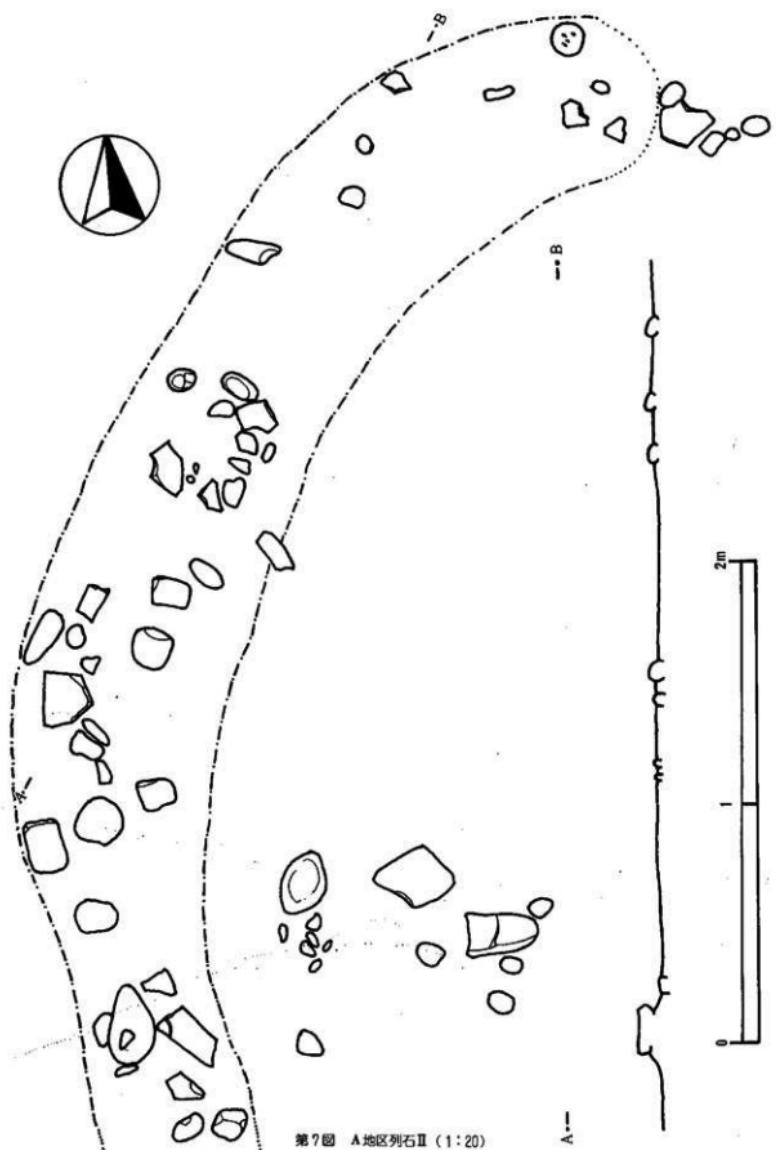
△列 石 中央 図



△列 石 中央 図



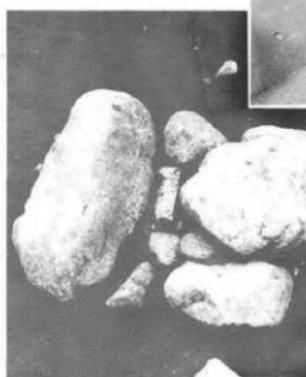
△列 石 東端 図 の 外況
。ややむかわいがちで、おつりの状態のものがある。



第7圖 A地區列石II (1:20)



第8圖 A地區集石遺構實測圖 I·II·III號(1:20)



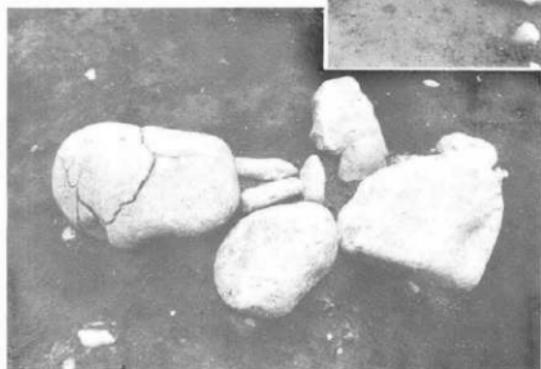
△石組集石遺構Ⅲ号



△石組集石遺構（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ号）

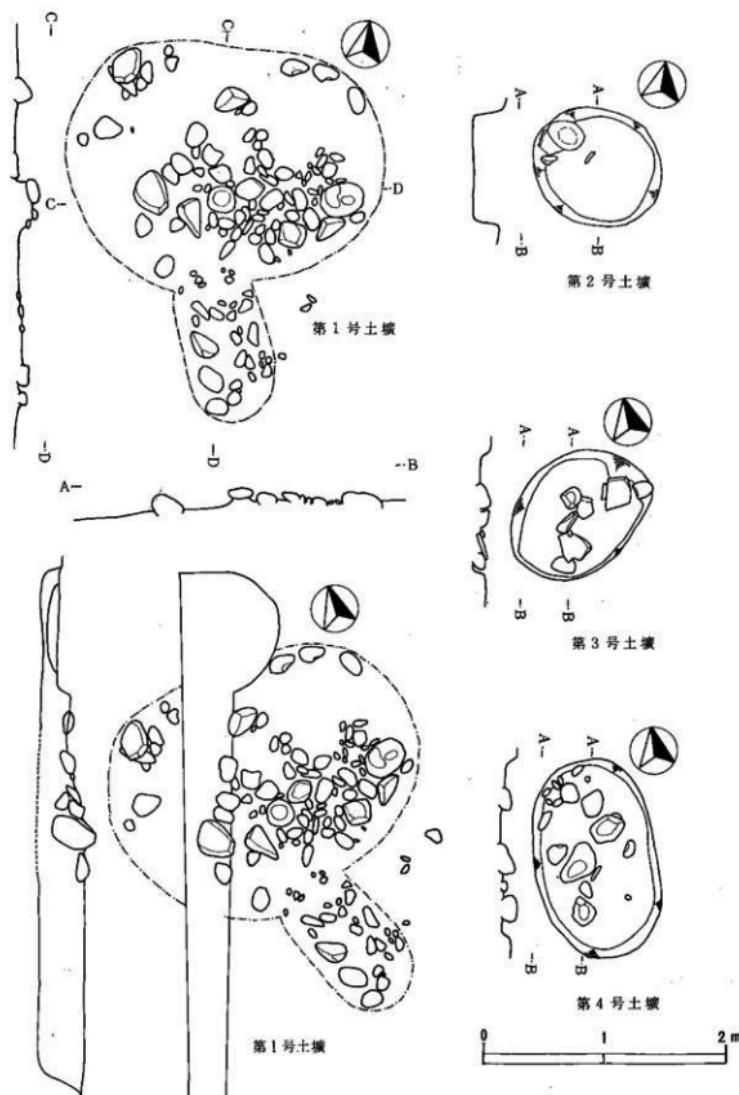


▽石組集石遺構Ⅱ号



△石組集石遺構Ⅰ号

・右端の石は焼石状をなし
ひび割れている。



第9圖 A地区土壤実測図(1) 1・2・3・4号 (1:80)



第10图 A地区土壤实测图(2) 5~16号 (1:80)

△土塙
△築石
△
かごうかごうの土塙と築石の構成

(1)

△土塙

(2)

△築石
△

(3)



△ 土塙

(4)



△ 土塙

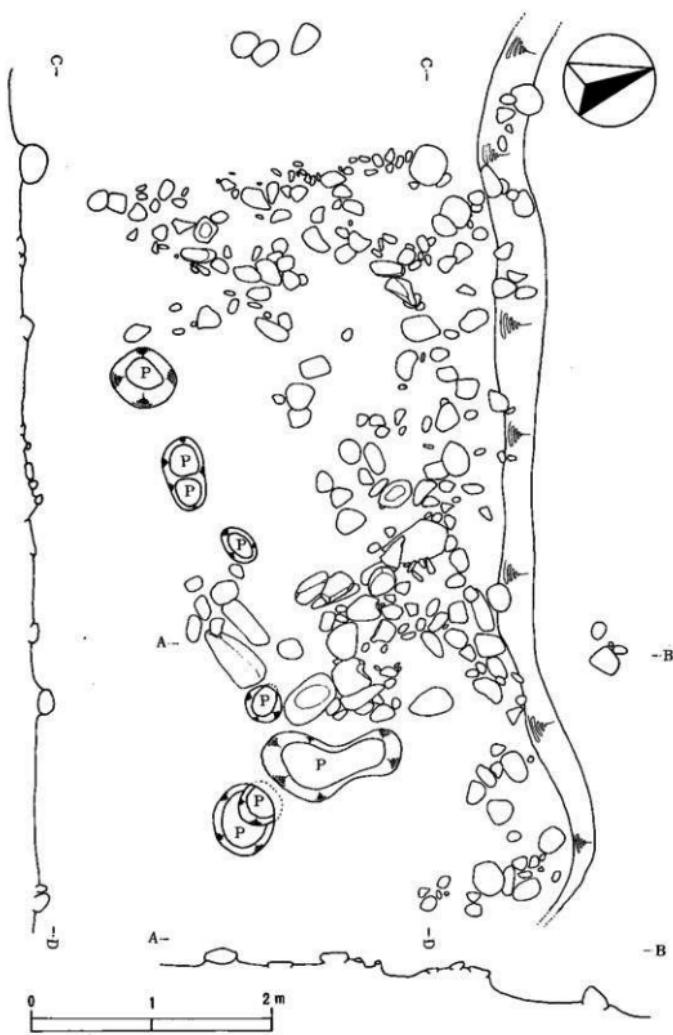
(5)



△ 土塙

(6)





第11図 A 地区配石遺構実測図 (1:80)

IV 出土遺物

出土遺物については、ABCのそれぞれの地区でふれるが、ここではその概要を示す。

1 土製品

縄文式土器(1)（扉のカラー4点）左上下の2個は小形の深鉢形、右上は變形か。これらは共に口唇部が数ヶ所上へ隆起している。右下の變形土器は、敷石住居炉趾出土である。共に文様は、縄文を主に蒐状沈線文が走る。

縄文式土器(2)（37頁中央）注口土器で、口縁と胴部以下と注口部を欠く。文様はひも状凸帯に蒐状沈線文を施し、平面部が縄文がべったりである。つりの把手が1対ある。やや白褐色である。

縄文式土器(3)（39頁～46頁）扉のカラー写真の各部分のものとみればよい。しかし異形な部分や文様もかなりある。

縄文式土器(4)（47頁上）蓋形土器で、つまみの部分と蓋の大部分を欠く。中央から4条の凸条帯があり、突刺文となっている。内側は文様がないが、中央部は1.4cmの小穴となっている。蓋の径は14.8cmである。

縄文式土器(5)（47頁～50頁）口縁が外ぞりをしているのが多い。把手はごく簡単で、その文様も若干の凹凸の変化をつけているだけである。肩部附近に凸帯を附しているが、口縁に近い部分を除き全面に突刺文を施している。

縄文式土器(6)（38頁写真上4点）鉢形2点・円筒形1点・塊形1点である。写真右上的一点を除き、高さ4cm以下のミニチュア土器である。文様はいずれもなくやや粗製品である。

縄文式土器(7)（38頁下右4点）土偶の完形品はなく、肩部1点・顔面1点・胸部以上2点の計4点である。いずれも小形品である。

土師器（59頁）皿・塊等である。今回の発掘のおり、各地區遺構の表探によるものである。器台のあるもの以外は、底部に糸切のあとがみられる。

2 石製品

打製石斧（51頁）粘板岩のものが大部分である。長さは、大きいもので13cm、小さいもので8cmである。形は、短矛形・分銅形が多い。

磨製石斧（52頁上）材質は多様で、安山岩・砂岩や頁岩等である。完形品は1点（中央下）だけで、ほかは頭部か刃部を欠いている。小形の1点（右下）は極部磨製の完形品である。

石鎚（52頁下）黒曜石や頁岩が主である。小形の石鎚が多い。

ミニュニア石器（52頁中）小形の磨製石斧2点（蛇紋岩）・垂飾（褐色）・小形石皿（褐色）・石匙（黒褐色）などである。垂飾と小形石皿の材質は似ている。

石棒（56頁上）大小4本あるが、いずれももろく、うす緑色のことが共通している。

石皿（55頁）片口状の皿部をつくっている。裏面をみると、足付・四石・蝶の巣石等となり多様である。

蝶の巣石（55頁中と下・56頁中・58頁下）石皿の裏面・河原石・石棒状の石に、人工または自然の穴が蝶の巣状になっている。その数は、数個から50個以上に及んでいる。

凹石（53頁・54頁）径10cm内外の河原石に、1～2この小さな凹を両面または片面につくっている。凹みの深さは1cm以内・径は2.5cm以内である。石皿状凹石は、深さ11.3cm以上・径5cm以上で、石全体もかなり大きいので区別して考えた。

すり石（58頁上・中）棒状のものもあれば皿状や自然石もある。いずれも磨いたり、すったりした残痕があり、なめらかである。58頁の上段は巨大である。同中段は比較的小形である。これは1号敷石住居趾より出土した。

3 その他の出土品

骨片 多数発見されたが、人骨片が2以上である。

自然石 水晶石2点・ろう石1点・豆状小石5点でいずれも美しい。

石くず 石斧等の石器を作った残渣とみられ粘板岩・黒曜石・頁岩等多量である。

（池田 実男）



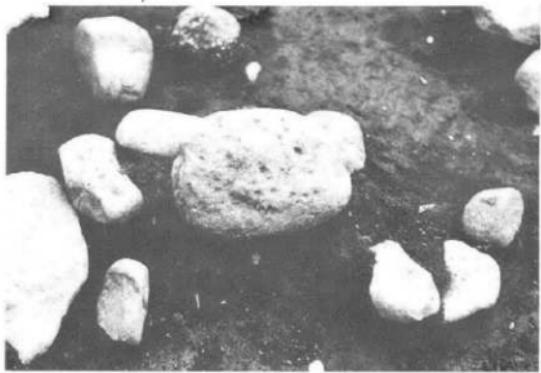
△土偶出土状況
・頭の底面回り
沈着がある。
(1)
△素面
(2)



△十箇口素面の土偶
△内式・三十箇口素面の土偶
(3)



図8(4)・(5)・(6)
日本弓器の遺物
・
11月11日。新潟・長岡市
近郊にて発見。





30件出土石器内腔部分的复原



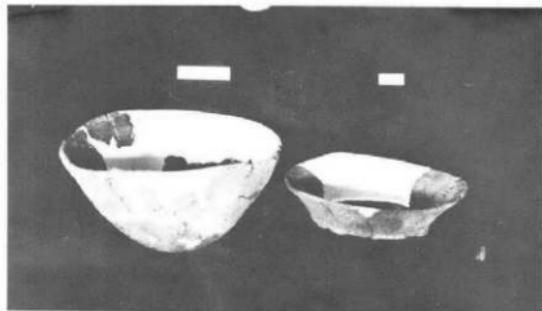
30件出土石器内腔部分的复原



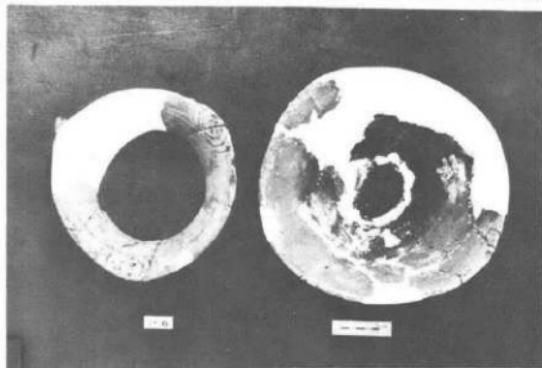
30件出土石器内腔部分的复原



30件出土石器内腔部分的复原



△縄文式土器 口縁部（模）



△縄文式土器 口縁部（模）

マ縄文式土器 漆鉢形土器と文様



器十件
△



— 16 —

（印文模十件）
器十件
△



（印文模十件）
器十件
△



— 4 —

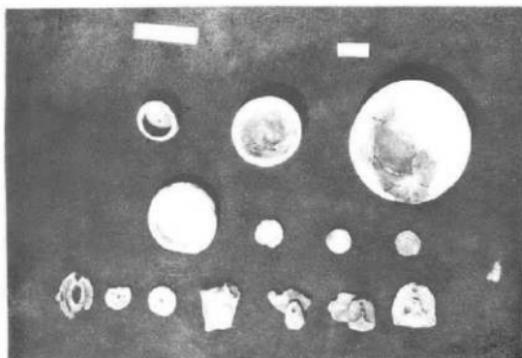
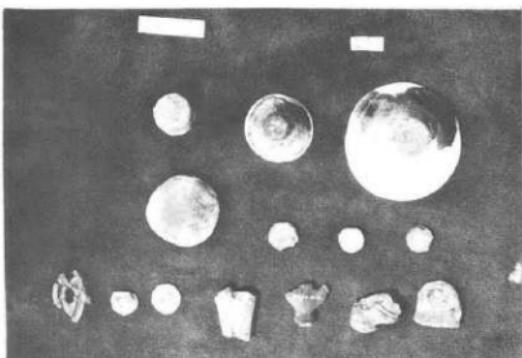
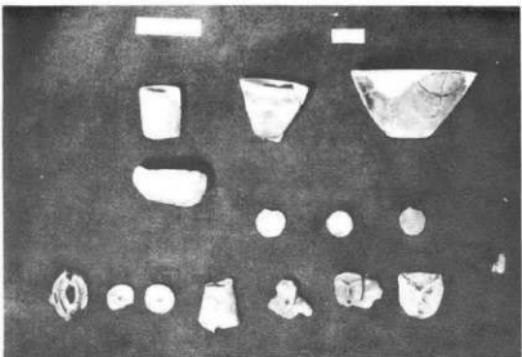
— 4 —

右上は小形の縁出で、やや深だなし。右側の三つは、左側の二つは日本製。ドウロウの匂を嗅ぎます。左側の二つは、日本製。

△縁文式土器 小形品（左）

△縁文式土器 小形品（中）

△縁文式土器 小形品（右）



(三) 陶片 (圖十) 之三

(1)



三

(三) 陶片 (圖十) 之四

(2)



四

(三) 陶片 (圖十) 之五

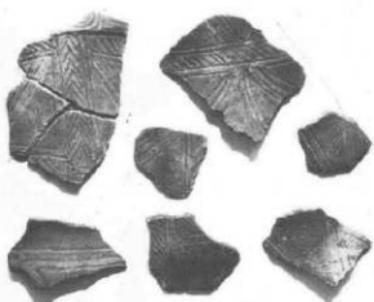
(3)



五

△獨立式(器)

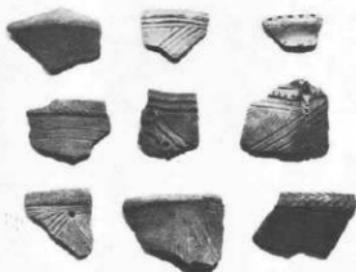
(4)



2-12

△獨立式(器)

(5)



2-14

△獨立式(器)

(6)



2-16

△幾文式土器 (縹々内式)

(7)



1-5

△幾文式土器 (縹々内式)

(8)



19

△幾文式土器 (縹々内式)

(9)



1-15

△縹文式(内式) 瓦片

10



10-2

△縹文式(外式) 瓦片

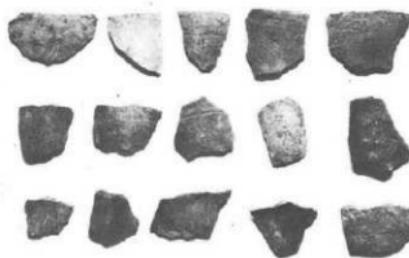
11



11-2

△縹文式(内式) 瓦片

12



12-2

△幾文式十箇（内式）

03



△幾文式十箇（外縁）

04



△幾文式十箇（内縁）

05





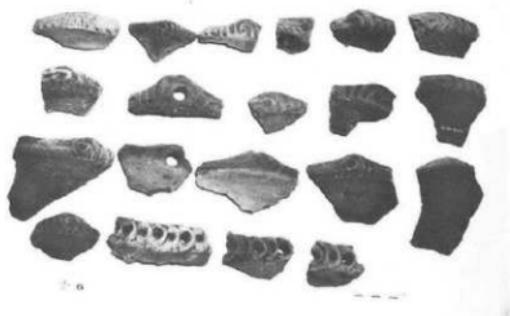
△漢文式十箇(内六式)

16



△漢文式十箇(内六式)

17



△漢文式十箇(内六式)

18

△鐵刃口器十個(馬家窯文化)

19



19-19

△鐵刃口器十個(馬家窩文化)

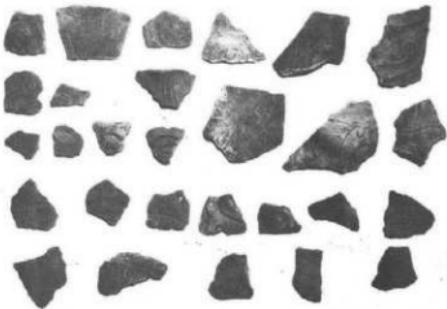
20



20-10

△鐵刃口器十個(馬家窩文化)

21



21-2

△繩文式十面形(縹れ内式)

22



22-15

△繩文式十面形(縹れ内式)

23



23-14

△繩文式十面形(縹れ内式)

24



24-15

B地区出土遺物

区分	種別	出土位置 遺物名	第1号 住居跡	第2号 住居跡	第3号 住居跡	住居跡 周辺	表 面 集	合計
縄文 時代	土 製 品	口 緑 部 口緑部把手 口緑部、低部 注 口 部 土 偶	6 2 1 8 3	5 3 4 8	5 2 7 8	3 4 1 1	3 7 4 6 1	5 6 7 8 1 4 1 1
	石 製 品	打製石斧 磨製石斧 凹石 石梯 磨製石片	1 3 9 7 5		2 1 1	2 2 1	1 2 3 3 2	3 4 5 1 0 1 3 9
	其 他	骨 燐 片 石				6 3		6 3
土 師 以 後	土 製 品	土 師 土 師 土 師 土師台着碗 土師内側 黑色碗 須 惠 器 灰 軸 片 片				1 2 1 1 1 1 2		1 2 1 1 1 1 2
	石 製 品	砥 石				1		1

(池田実男)



△縄文式土器 (1) 十十編織式
△縄文式土器 (1) 上部部分中央のつまみが欠けていて、中央から外へかけての凸部上面上をきじめ、全表面に複文がある。
下は内側から中央「小六」がある。



△縄文式土器 (1) 十十編織式

△繩文式土器 (三) (共三十五種)

(3)

△繩文式土器 (二) (共三十五種)

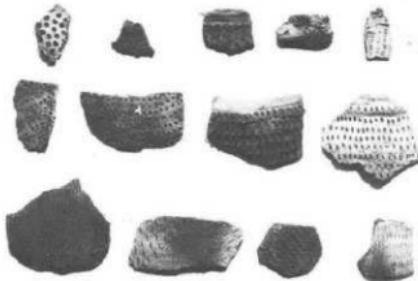
(4)

△繩文式土器 (一) (共三十五種)

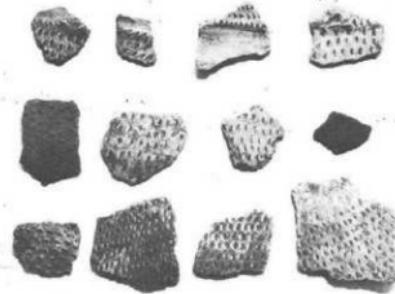
(5)



3



4



5

△ 蔡文式三足鼎
（孔施面十三）

(6)



3-11

— — —

△ 蔡文式三足鼎
（孔施面十三）

(7)

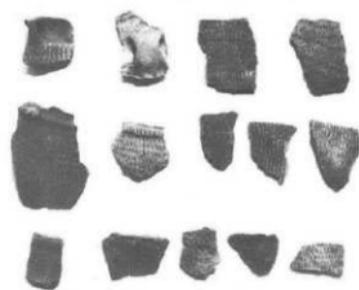


3-12

— — —

△ 蔡文式三足鼎
（孔施面十三）

(8)

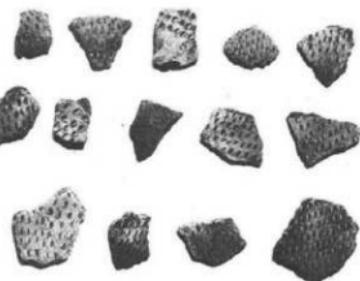


3-13

— — —

△繩文式(三) 斧

(9)



4-8

△繩文式(三) 斧

(10)



4-5

△繩文式(三) 斧

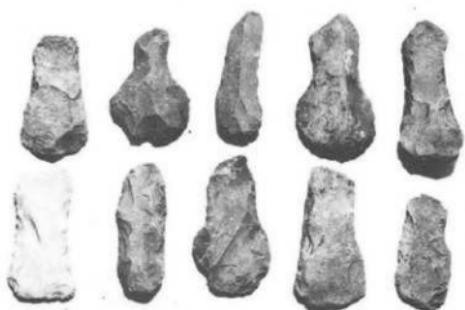
(11)



4-6

△打製石斧

(1)



-27

△打製石斧

(2)



-28

△打製石斧

(3)



-29

形状が複雑で、三種類に分ける。上は尖頭形、中央は短頭形、下は三葉頭形といふ。上・中の二種が多い。

・ 調査の結果、この時代の石器は、主として打製のものである。

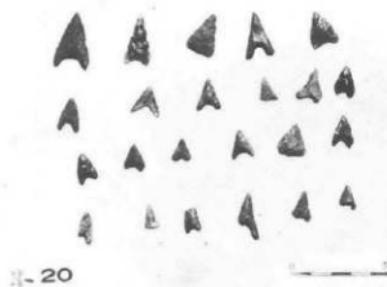
・ 打製の石器は、小ぶりのものが多い。また、小ぶりの石器は、主として打製のものである。

・ 比較的小形のものが多く、すべて無精臼。

△ 打製石器

△ 小ぶりの石器

△ 打製石器





△凹 石 (1)



△凹 石 (2)

凹石には1孔のもの・2孔のもの・両面にあるものあり。

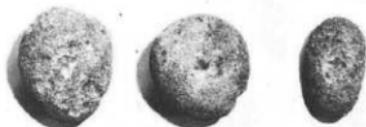


△凹 石 (3)



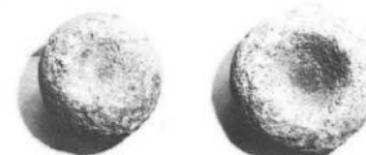
△凹 石 (4)

△ ▲ △ ▲ △ ▲ △ ▲ △ ▲



— 14 —

△ ▲ △ ▲ △ ▲



— 15 —

△ ▲ △ ▲ △ ▲



— 54 —

△ ▲ △ ▲ △ ▲
△ ▲ △ ▲ △ ▲
△ ▲ △ ▲ △ ▲

• 14日目の表面はまだつるつる。まだ
其の表面で毛を十六毛、幅十一ミリ、厚さ
六・五ミリ、やわらかく堅膜切である。

△ ID 目 (発)

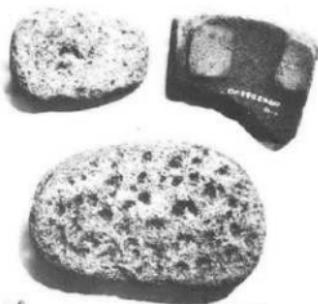
(1)



• 16日目の表面はまだつるつる。まだ
其の表面で毛を十六毛、幅十一ミリ、
厚さ五・五ミリの堅膜切。其の後も一毛もあらず。
やわらかく堅膜切で表面は變化していない。

△ ID 目 (発)

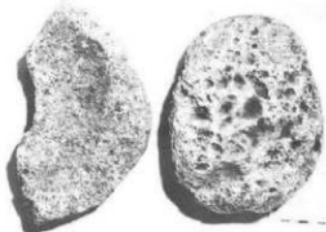
(2)



• 16日裏は様々である。三列と、葉の裏に
やわらかく堅膜切で表面は變化していない。

△ ID 目 (発・裏)

(3)



— 20 —

・ じよれせつや褐色をなす石でやわらか。
粒度のものばかりが多いために、
三十二枚のやうにひきあわせた。

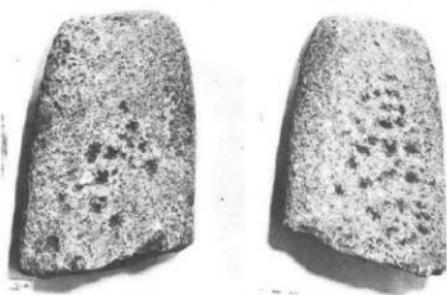
中央ノミ I - II 五枚

△右 棒



・ 中央ノミ I - II 五枚、長さ二十六㌢であ
るが、下部は欠除している。やわらか
河原石で、それの面に「多数の棒の巻状
の小穴がある」。

△右棒状峰の巻口(表・裏)

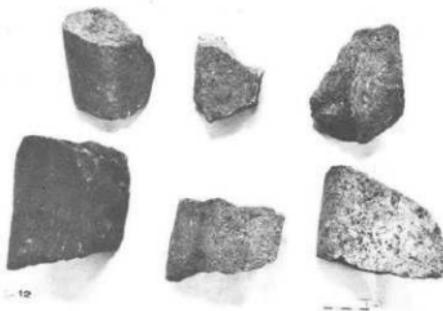


△底 石

・ 砂岩質のもので表・裏共に
石凹状をなしている。まわりに
数条の凹みをもつていて
ある。一部欠除している。

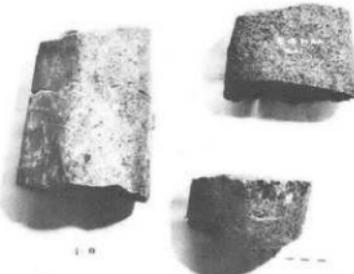


△棒状すり石片 (1)



△棒状すり石片 (2)

△棒状すり石片 (3)



いずれも打たれ物であるが、器のものもある。石棒状のものもある。

・一本とも回大ぐあみ。右は約五十五、
左は四十四である。共に角柱形でその
うがい面が特徴的なもの。

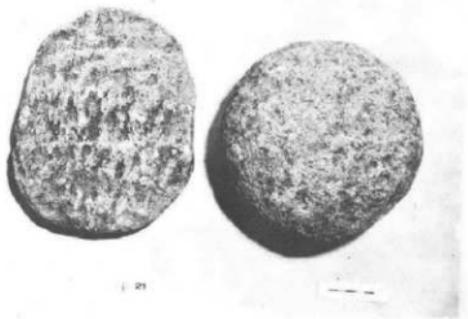
△柱状すり石



△小形すり石



△骨の剥離工具



・上のはやや状態が異なる。左は柱状頭
部のみに出たもので、右は頭部がなく
ややかたへり。右は一端を欠いていたもの
が多い。

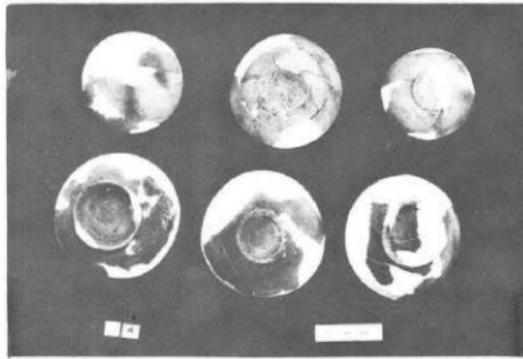
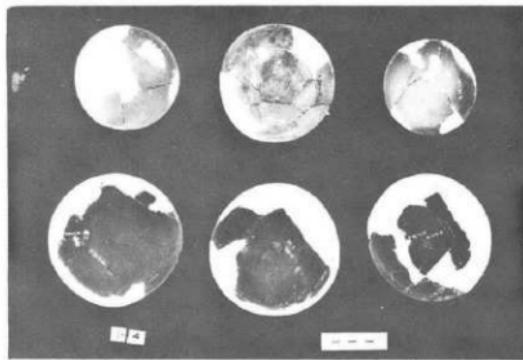
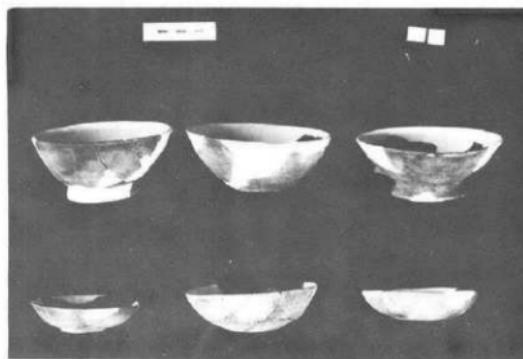
・右は球形、左は板状の骨の剥離工具であ
る。工具では珍めがけめ。

△ 極端な形
△ 地面仕上げ紙に於ける凹凸のあらわしがみられる。

△ 極端な形

△ 下から

△ 上から



V B 地区

ここはA地区とC地区のほぼ中間で（第2図参照）、伊勢宮501の25番地の、段丘状の水田跡地である。付近は岩礫が多く、水田の床土の下へ一面に石を敷きつめている。遺跡はその下部に眠っていた。遺構も非常に岩礫が多く、発見された3基の住居跡内は、意図的に安山岩平石や河原石がほうりこまれた状態であった。

1号住居跡

この住居跡は、やや橢円形をなす竪穴式住居跡である。内径は2.5m、短径は2.4mである。柱穴は内壁部にそつて5個、外壁にそつて11個がめぐらされている。しかし2号跡と重なっているため、どちらの柱穴であるのかは不明なのがある。

ほぼ中央にある石組炉は、河原石8個によって組まれている。外形は橢円形をなし、長径約0.8m、短径約0.7mである。内形はほぼ五角形をなし、長尺0.5m、短尺0.4mの炉である。炉はかなり利用したとみられ、まわりの石圍は焼けただれている。特に北西の1個の石は焼けて風化し、くずれ落ちていた。炉内には土器片や焼土や炭化物がかなり見られた。この焼土に混じって、土器片10数点、河原石数個が有った。炉のまわりからは石捧2点、石皿や工作台とみられる河原石等があった。土器は縄文式土器199点、土師器8点等である。

2号住居跡

1号の北西部に接する略円形の竪穴で径約2.7mの住居跡である。竪穴の外壁にそつて9個の柱穴があり、その外側に約10個の柱穴がある。内側の柱穴はやや小さく外側のはかなり大きい。これもやはり1号と重なっているため、どちらに所属するかは不明の柱穴もある。

中央よりやや西に大穴状の炉跡とみられるものがある。長径1.1m、短径0.9m、深さ0.4mで舟底型をなしている。炉跡としてはかなり大きい。上層は約0.12mからの混入物があり、黒褐色の土砂と礫の混入した層である。中層は約0.15mで灰褐色の土砂と礫が混在している。若干の灰化物、残灰がみられる。以下下層は茶褐色礫層で、焼土が多くみられた。遺物は住居跡内南側から、石皿が1点、北側から石捧片が1点、回石1点が検出された。そのほか縄文式土器56点等である。

3号住居跡

内部に、6個の柱穴と外壁に5個の柱穴の発見をみた。2号住居跡と似た配置の柱穴である。柱穴はやや小さい。炉跡はほぼ中央部にあり南西0.7m、南北0.8mで、橢円形をなしている。最深部は0.35mでわん曲していた。焼土や灰化物はごくわずかであった。南壁部や東より土隅1点が発見された。縄文土器88点と、打製石斧石皿各1点等の出土をみた。また土師器（59頁参照）ほとんどはこの住居跡南西部の付近からである。

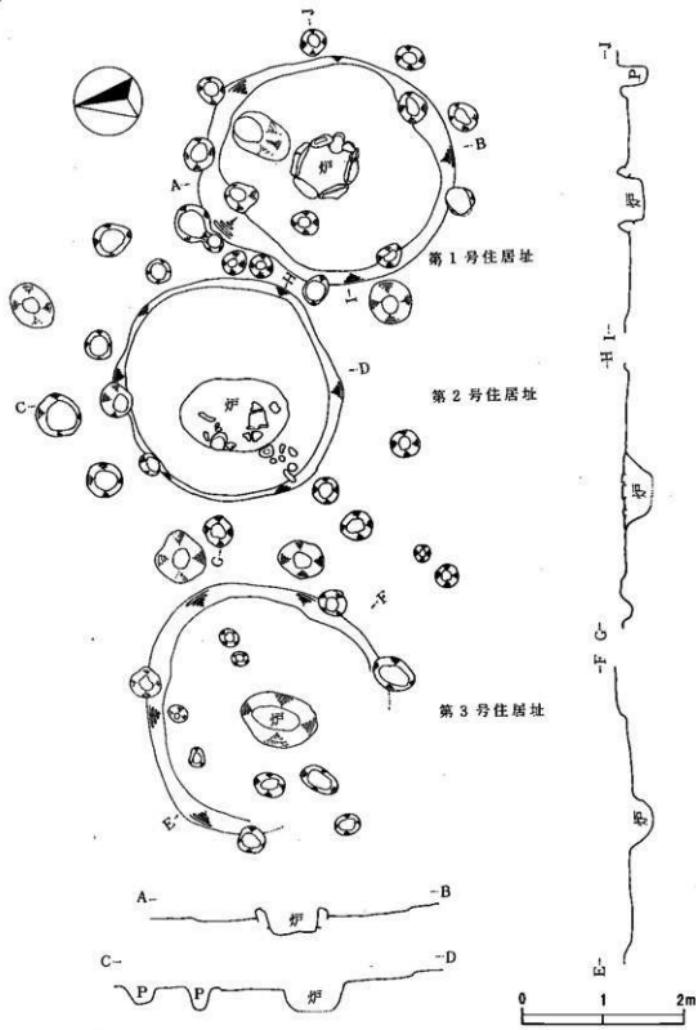
以上3号の住居跡は、中央にいざれも炉跡が検出された。特に1・2号はかなりの使用した痕跡がみられる。また2・3号の炉跡は、かなり大きな炉とみなければならない。

竪穴式住居跡は、いずれも円形に近く、周辺に二重の柱穴があり、内側は小さく、外側は大きいのが特色である。発見された3基の住居跡の時期的な差は若干あるものの、堀之内I式土器を主体にしたものであった。しかし完形品は1点も発見できなかった。

住居跡の性格は、日常生活からとらえてみなければならない。発掘途上にみられた住居跡内の安山岩平石や、岩礫の投げこみは何を意味するものか。

また土師後期の糸切り皿等も多数発見されたが、水田であったため表面がかく乱されており、遺物の発見等に留ってしまったことは誠に残念である。

（池田実男）



第12回 B地区 住居址実測図1・2・3号 (1: 180)



△ B 地区 住居跡 発掘全景(左から3号・2号・1号)

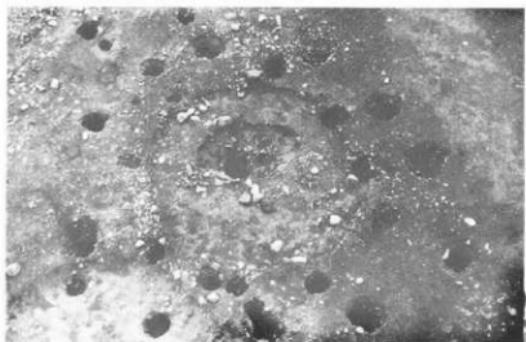


△
▽ 1号 住居跡

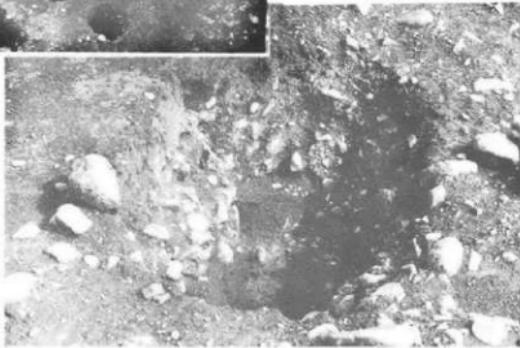


▽ 1号 住居跡 中央の炉跡





△ 2号住居跡



△ 2号住居跡 中央炉跡



△ 3号住居跡



VI C 地区

C地区での注目された遺構は第13図に示す中央に凹部のある、第1群集石遺構とその南西に統いて発見された集石と1対の立石遺構が一体となった、二群の遺構で、これらは農耕事業に伴ない表土（耕作土）をブルトマイヤーで削除した結果、研磨された平板石等が露出して注意され、今回の調査となった。この地区的南側の部分を東南から西北に向って遺構上を川が乱流した形跡が認められた。この時混入したと思われる、土師器、須恵器の細片が若干認められたが、ほとんどは、掘之内期に属する土器片で細片が多く、ローリングされ、復原は不可能に近い。遺構面の土質は黒色の粘土で堅く下層は砂礫層となっている。

C地区遺物集計表

口縁部破片	92	打製石斧	1	凹石	2	石棒状河原石	11
底部破片	57	打製石斧片	1	工作台石	1	灰釉片	1
縄文土器片	1955	石皿破片	1	石製垂飾	1	須恵破片	4
把手部破片	13	ミニ石皿	1	石鐵	3	土師破片	32
注口部破片	1	土偶面破片	1	石屑	—		8

第一群集石遺構

中央に角面をつき合せた、平板石を組合せた炉址状の凹部を持ち、周囲の石の表面に磨かれた痕や敲き面のある石など存在したが、凹部からは埋甕や炭、灰などは検出されなかった。

平板石はA地区住居跡使用の石と同じ安山岩で近くの山から運ばれたと思われ、その他の石は現地の石と思われる。

集石中央部のハ字状の石組とその東方向にY字状に石が配列されている点と、南側の配石が孤状になっている点など注目され、柄鏡形の住居址、祭祀の配石跡かの究明は今後の課題としたい。

第二群集石立石遺構

発掘当初、一群の集石遺構として注目されたが、注意して集石を取除くと第15図の如く立石と前庭敷石の遺構が1対となって現わされた。

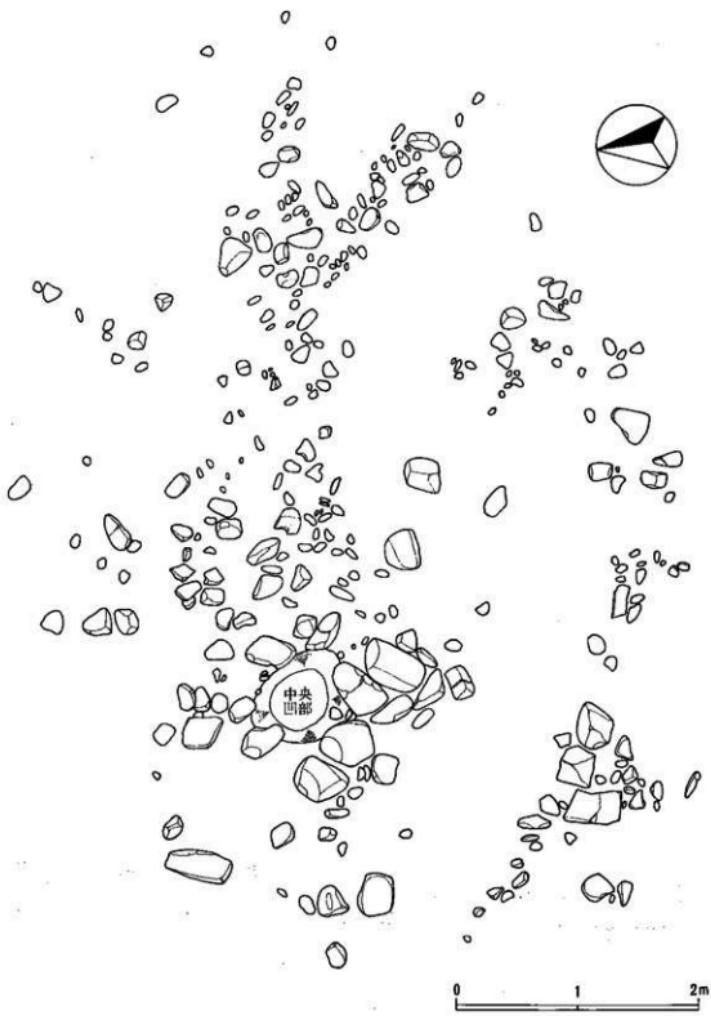
S:立石(東南側)を中心とした側に集石が多いのが注目される点で、大きさ0.3m内外の石から0.8m内外の石が使用され、深さ約0.3m、周囲直径1.5mの範囲に集められていた、中に若干壺の内期の土器片が認められた外は他の遺物は認められなかった。

S:立石(北西側)は直径0.35m×0.3m、長さ0.57mで前庭に平板石が1個据えられ周囲を長方形の石で囲んでいる。

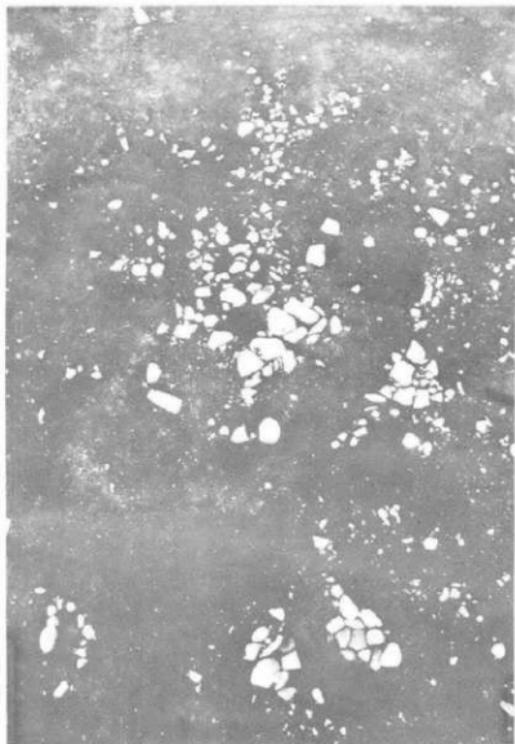
S:立石はS:立石と1.12m離れて1対の存在で確認され、直径17cm、長さ50cm程の細長い河原石で、前庭に5個程、平板石を据えている。加工はされていないがS:立石は男性器と見られても仕方が無い形狀を示している。

このS:立石の方向には、志賀高原の笠岳(2076.8m)が遠望され、円頭形の山容が類似している。S:立石の方向は高社山(1351.5m)と蛭尾山(1381.8m)との間に向っており、現在の夜間瀬川の流路と合致する。この様な事から第二群集石立石遺構は(1)子孫繁栄の願い、(2)庭園に供え豊獣、豊漁の祈り、(3)人的や物的な交流の問題など後期時代人の信仰や精神生活やその背景の社会が想像されるが、これらを示す好例として興味ある遺構として記憶されるべきであろう。

(権原長則)



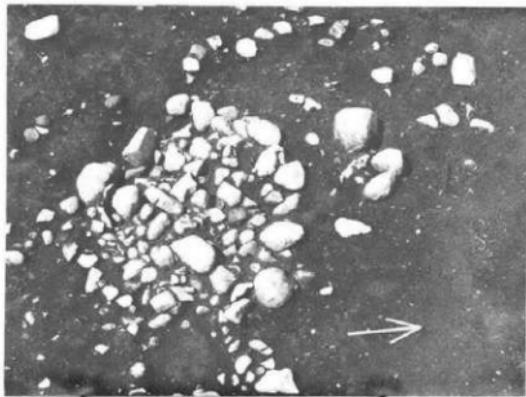
第13回 C地区 第1群散石遺構実測図 (1:180)



△ C 地区遺構 配石敷石遺構（上）と配石立石遺構（下）
中央部の部分を示すハ文字の右側。Y字形の配列、蓋状をもつて配り、右下に立石遺構が見える。



△ 突石遺構 中心部
中央が回折となり窓型の形をもつてつくられた。



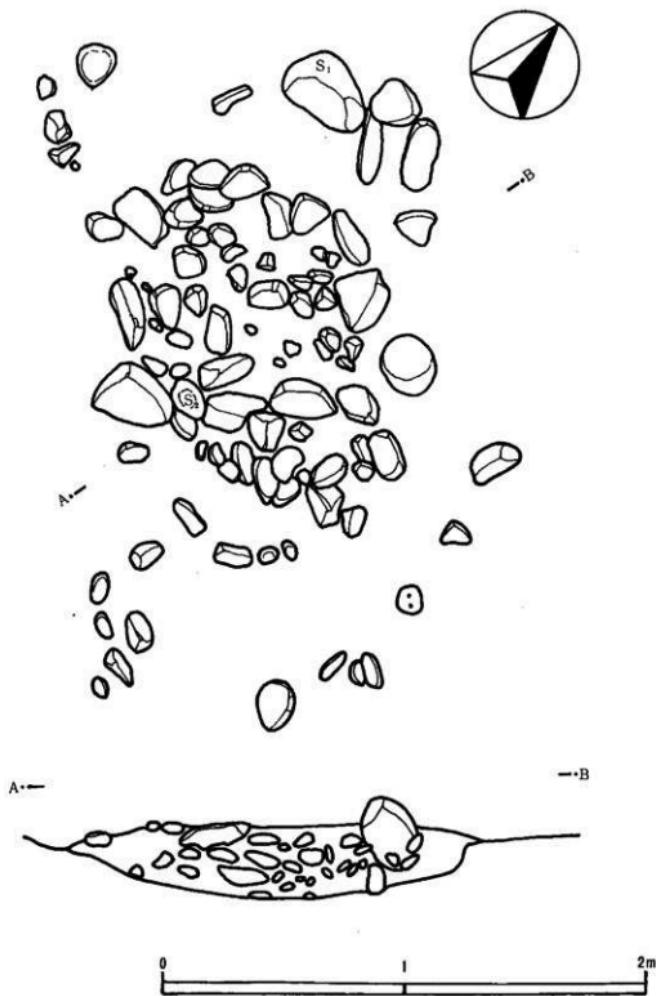
△集石立石遺構
・表土を除いた所で立石が、中央石に面りに群んで離れて四個の石と見える。
・S立石は他の中央石を離れた位置で存在している。



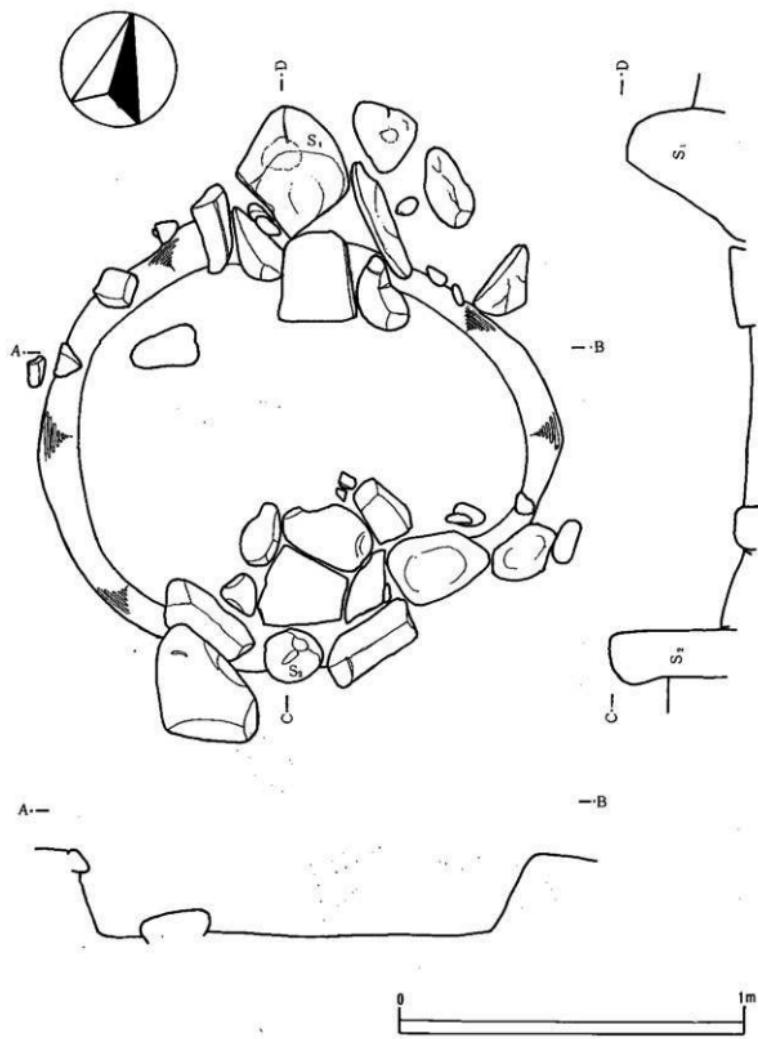
△集石内立石遺構（右から左へ）

△中央凸状の山が遺跡
・あるあたり方に出張がある。





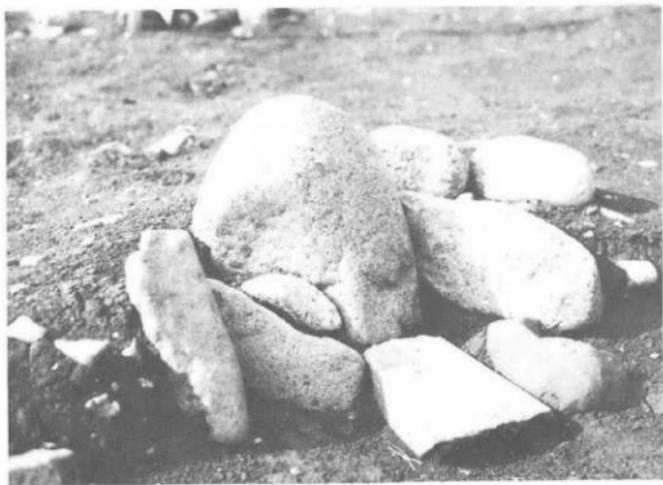
第14回 C地区 集石遺構実測図(1)



第15図 C地区 集石立石遺構実測図(2)



△集石内南側立石 (S₂)



△集石内北側立石 (S₁)

VII まとめ

伊勢宮遺跡の今回の発掘は、本郷区の圃場整備事業に伴うものである。昭和53年10月の山ノ内町教育委員会の事前調査では、伊勢宮2945-1の一部から若干の土器が出土するので、年内に調査してほしいということであった。

準備がととのい、調査を開始したのが11月にはいってからである。その結果この報告に記載した、第2号の柄鏡形敷石住居跡と、1号弧状列石が検出された。この発見によって、ここは単なる遺跡ではなく、多くの謎を秘めた遺跡であることが示唆された。

一方圃場整備事業が進むにつれて、方々から遺物・遺構の発見もあり、真冬に向かっての発掘のため、一時発掘を中断せざるを得なかった。よって翌年3月発掘を再開し、5月に発掘の完了をみたのである。

発掘の成果は、各調査員の報告にもある通り、縄文時代後期前葉の遺物・遺構である。遺構では、A地区の柄鏡形敷石住居跡2基・広い配石遺構1カ所・弧状列石2基・土塙のない集石3基・配石土塙28基・その他ピット多数。B地区からは、堅穴式住居跡3基。C地区からは、柄鏡形敷石住居跡1基・配石土塙1基等の検出である。また遺物として、土製品39,964点・石製品709点・その他516点・合計41,189点の多量に及んだ。

今回の調査を一口にまとめて言うならば、この遺跡は、縄文時代後期前葉の住居跡と配石遺構を中心とした遺構・遺物をもつ祭祀の遺跡であって、当方では、数少ない縄文時代の重要な遺跡であることが確認された。調査の細部にわたっては、各調査員の報告で明らかであるが、若干の私見を述べまとめとしたい。

検出された祭祀の配石遺構は、縄文時代中期以降の後・晚期においては、関東・中部地方から、東北・北海道にかけてである。しかしながら配石遺構に関連する敷石住居のうちの、柄鏡形に寄せてみると、更にその分布もせばまり、関東山地から中部山地に向けて主体的に受容されるものである。

当遺跡発見の敷石住居跡は、中部地方における最北端の敷石住居跡とみてきたが、その後新潟県に三例確認された。そのうち、津南町沖ノ原の敷石は多角形であって、当遺跡の2号敷石住居に類似するが、柄鏡形であるかどうかは確認できない。また同遺跡の第2号住居跡は、敷石はないものの、住居跡内に柄鏡形の部分があり、注意をひいた。県内の近例では上高井郡高山村坪井・上水内部三水村小野に例があり、飯山市桑名川もその痕跡がある。しかしこれらは柄鏡形でなく、県内では、小諸市郷土・北佐久郡軽井沢町茂沢など数例を数えることができる。数少ない事例から伊勢宮の三例の発見は快挙といいたい。

1号敷石住跡の張出部の土塙からは石棒状石が、また出入口部の土塙からは細長い凹石状石が検出された。ここからは埋甕や幼児骨などの検出はなかったものの、この石製品は好事例となり得る。2つの土塙のすぐ隣りには、ピッタリ合う蓋石が横に置かれていた。蓋石と土塙内の2つの石製品は何等かの意味においての墓壙祭祀か信仰祭祀とみたいのである。

A地区的二つの敷石住居跡は、若干の時期のずれはあるものとみられるものの、同一方位にある。即ち1号の2つの土塙と炉を通したライン。2号は張出部前の土塙と、出入口部のすえ付の石皿と中央の炉を通したラインは共に同一方位である。共に志賀のU状突出の笠岳(2076.8m)に向かっている。一方の下の方は、遺跡を流れる泡貝川や夜間瀬川の谷間に向けられている。その方位と地形から、山岳信仰や豊饒と谷川の豊漁の願いがうかがえる。この例は屋内祭祀であるが、屋外のC地区的集石土塙にもみられる。ここからは、男女を標示す立石がある。子孫繁栄という願いだろうか。しかしその方位もまた、敷石住居跡と同様な方位にある。山梨県大泉村金生遺跡の立石は八ヶ岳と富士山に向けていた例からも山岳信仰説も有力である。

A地区的敷石住居とB地区的堅穴住居は、柱穴が住居跡の周壁部にそって外側と内側にみられる。A地区的2号敷石を別とすれば、共に内側の柱穴は小さく、外側は大きい。一般にこの期の住居跡では外周に柱穴がみられないのが普通である。南安曇郡穂高町離山の住居跡も、外周に柱穴がみられること類似性がある。すでに遺跡の

位置や環境のところでも取り上げた如く、伊勢宮のように、山背風の吹きさらす地帯での特殊例を示すものか。現に柄鏡形住居跡も地形を生かし張出し部は、風を直接受けぬ東（C地区住居跡）または西（A地区住居跡）方に若干寄せている。また北側の柱穴の方が大きく、また数も若干多くする工夫もみられる。竪穴の住居（B地区的住居跡）の炉も大きく、焼土も多く寒さに対する防備の工夫がみられる点にも注意したい。

今回発掘された土器をみると、壠之内1式を主体に、三十稻場式の土器がかなり認められた。当遺跡からの三十稻場式の発見は初めてである。この式の土器は、新潟県を中心に東は山形・仙台にまで分布をみせている。県内では、飯山・中野・須坂にも及び、その末端は、上水友郡信州信町宮平にもおよんでいる。当遺跡の三十稻場式は、三十稻場のそのものを受け入っている。即ち文様では、口縁部・底部の一部を除き、突窓部にも突刺文をほぼ全面に施している。口縁近くにかんたんな把手を附し、どちらかというとすんぐり形の變形の土器であろう。

また中央につまみを附した蓋形土器もあり、文様は器部と同様である。33頁下は壠之内と三十稻場式の同時出土の好例である。両文化が共に受け入れられた遺跡である。したがって、伊勢宮独特な遺物の発見は特に確認できなかつた。

2号土塙墓と2号敷石住居と1号列石は、一連の関係のものであろう。住居跡の張出部前に土塙のある例は多摩市道1,458号線をはじめ他に類例もある。ただこの遺跡の土塙墓は、人頭形の石の首すじへ石の先端を突刺した状態は無気味である。また住居跡前の1号列石の東端に立石をし西に向かって伸び、列石は住居跡に接近し、そして西端部では列石が抜かれている。そして第1号敷石住居跡によってさえ切られている状態がある。以上3者は屋内祭祀と屋外祭祀の一連の関係でとらえるべきであろう。

このほか、なぞめいた遺構・遺物は多くある。例えば、A地区の小集石の遺構の焼け石のひび割れは、何を物語るかである。食物調理場か祭祀かの問題を解く資料は現状はとぼしい。ここでの明らかなことは、敷石住居を含んだ各種の配石遺構は、墓誌的や信仰的な遺構の祭祀遺構である。ただどのように位置付けていくかは、今後の研究にまたねばならないことが多い。長野県内にはこうした敷石住居や配石遺構の関係遺跡は、時期的な差異はあるが、縄文中期末から後・晚期にかけて主体に百十余カ所確認されているが、その実態の解明は充分とは言いがたい。ましてや、当遺跡の研究もこれからが出发点である。

終わりに発掘調査に関する問題点を取り上げるならば、発掘の時間に制約があったり、経験不足のための調査であった。しかしながら、夜の明けるのを待つての現場視察や、降雨後の見回りから、土壤の自然の姿を見つつ、柱穴・土塙・住居跡の区画を確認することができた。「発掘は終わる頃になって新発見があるが如く」であった。関係各位の協力に感謝しつつ、また研究者各位の今後の指導をお願いしたい。

（田川幸生）

主な参考文献

- ア 秋元 真澄 1977 「第3章遺構」「沖ノ原遺跡発掘報告書」 津南町教育委員会
コ 小松 康 1961 「長野県東篠山郡 波田村草原遺跡第1・第2次調査概報」 信濃第18卷第4号
ナ 中島 庄一 1978 「縄文時代」 多摩市道1,458号線遺跡昭和53年度調査報告
多摩市道1,458号・1,461号線遺跡調査会
中村・福田・金子 1970 「上並松遺跡」 朝日百塚・並松遺跡 越路町教育委員会
ミ 宮下 健司 1979 「長野県内出土の敷石住居・配石構一覧表」 信濃考古ほか
ム 村田 文夫 1975 「柄鏡形住居跡考」 古代文化202
モ 森嶋 稔 1978 「信州新町の考古学的調査」 信州新町史
森嶋 稔 1980 「八ヶ岳南麓大泉村金生遺跡見学記」 しなのろじいNo.100
ヤ 山本 輝久 1976 「敷石住居出現のもつ意味」 (上)(下) 古代文化
山本 輝久 1981 「縄文時代中期後半期における屋外祭祀の展開」 信濃第38卷第4号
ヨ 与良 清 1974 「第1章小諸の黎明」 小諸市誌考古編

山ノ内町夜間瀬伊勢宮遺跡調査会

調査責任者	村上 富吉(山ノ内町教育長)	(調査員)
指導	永峰 光一(国学院大学文学部講師)	団長 田川 幸生(中野市平野小学校教諭) (現山ノ内町小教諭)
顧問	関 孝一(長野県教育委員会文化課指導主事)	主任 畑上 秀雄(山ノ内町文化財調査員)
顧問	金井喜久一郎(山ノ内町文化財専門委員長)	榎原 長則(中野市文化財調査員)
参与	金井 涩次(中野市文化財専門委員長)	調査員 池田 実男(中野市文化財調査員)
参与	小林 肇男(山ノ内町役場農政課長)	山上 右八(山ノ内町文化財調査員)
参与	小林 肇男(山ノ内町役場農政課長)	滝沢善次郎(山ノ内町教育委員会施設係長) (現農政課長)
参与	畔上 正(集団農区本郷地区整備組合工事委員長)	金井 正三(須坂市教育委員会)
参与	畔上 重芳(本郷区長)	金井 喜美(須坂市)
事務局	田中 満(山ノ内町教育委員会事務局長) (現教育長)	荒井 宏(長野大学 学生)
坂口 孝雄(山ノ内町教育委員会社会教育係長) (現同和教育係長)		
調査協力	高橋 桂(飯山北高教諭)	山ノ内町役場農政課耕地係
	松沢 芳宏(日伸精機社員)	中村賢一・吉池茂敏・徳竹章彦・黒岩きく代
	望月 静雄(飯山市教育委員会)	點施工管理設計事務所(所長畔上格)
	阿部 与一(山ノ内町平穏農協)	本郷区・集団農区本郷地区整備組合
	布施谷写真館	山ノ内町西小学校

(発掘調査参加者)

畔上たけ子・小島博士・小林みよし・池田奉子・畔上つねじ・畔上国義・宮本れい・杉山久松・大塚光子・湯本ひろ子・丸山王子・小野沢しげ子・中島宏治・大塚すみ江・中島孝則・小林千代子・池田重信・池田律子・池田弘正・田村みさお・池田まさ子・畔上きよ江・畔上よし子・佐藤弥一郎・畔上博至・大塚ひろ子・小瀬よしの・小林まさ子・下田義明・畔上光弘・畔上あさ子・湯本秀雄・湯本義男・中山慶十郎・桜井和彦・市川昭平・佐藤利彦・坂口ハル子・齊藤むめ・小坂忠子・池田昭一・柳沢定正・山上命子・山岸さつき・小松順子・山岸大清・山岸哲・小松きの・新井基之・山上昌広・山口もも江・横沢武文・小野沢とも江・関武・宮沢一夫・畠山健一・畔上文恵・畔上広幸・畔上耕児・常田いとじ・畔上ちよし・小松重幸・大塚しづ子・仲俣修

(遺物整理参加者)

中村よね・小林春江・田川みき・小林かず子・牧野正子・井出きみ子・北沢勝実・塙本智恵子・荒井よしゑ・榎原千香子・山崎容子・伊藤雄子・小林葉子・高野秀子・田川千恵子・高見沢俊江・涌田豊子・湯本由美子・石田優・子・小坂まゆみ・村上順子・中村美佐江・山口久子・関修子・阿部ヒロミ・宮入はる美・増田都子・横田順子・小松みゆき・山岸智子・笠原麗子・清水みや子・坂口千恵子・高見沢由美
(順不同敬称略)



△発掘調査のメンバー



△調査会役員の遺跡の検察



△バックホーによる埋立作業



△遺跡の測量をする調査団員



△指導者永峰講師による講話
(遺跡隣りの農業社にて)

山ノ内町夜間瀬

伊勢宮

昭和56年3月30日

編集 伊勢宮遺跡調査団
田川幸生・畔上秀雄・植原長明

発行 山ノ内町教育委員会
長野県下高井郡山ノ内町大字平塚3352-1

印刷 北信ローカル社
中野市三好町1-3-10

